西有田町縄文遺跡

佐賀県教育委員会

昭和四十四年三月

佐賀県西松浦郡

西有田町縄文遺跡（本文編）

佐賀県文化財調査報告書　第十八集

佐賀県教育委員会

発刊に当つて

西松浦郡西有田町には、縄文時代の遺跡が相当広範囲にわたつて分布している。この遺跡群は、黒曜石製の石器類を中心とする遺跡であつて、黒曜石を産出する伊万里市の腰岳に近接しているという地理的な要因にもとづく点が大きいと考えられるが、その文化相については学術的に調査がなされないままに時日が経過した。

佐賀県教育委員会は、この遺跡群の重要性を考慮して、昭和四十二年度に国庫補助金の交付を受け、西有田町の協力をえて、この遺跡群の発掘調査を実施した。数多い遺跡の中から特色ある三か所の遺跡を選んで調査したのであるが、出土した遺物は多量であり、しかも、学術的に重要なものを含んでいたため、資料の整理に相当の日時が必要であつた。そこで、四十二年度には取りあえず遺跡や遺物について若干の写真を掲載した図録編を発行するにとどめざるをえなかつたが、一通り遺物の整理が終つた今日、改めて本文編を発行するに至つた次第である。

この報告書は、今日まで本県においてはほとんど実施されなかつた縄文遺跡の発掘調査の結果をまとめたものであつて、本県における縄文時代の文化を究明する上から裨益する点が大きいものと期待されるのである。

本書を発刊するに当つて、この遺跡の発掘調査に終始ご協力をいただいた西有田町当局や地元関係者に対して、あらためて感謝の意を表するとともに、遺物の整理や報告書の執筆に当つていただいた方々に対し厚くお礼申しあげる次第である。

昭和四十四年三月

佐賀県教育委員会

教育長　森　一郎

西有田町縄文遺跡目次

第一章　発掘調査の経過……（一）
第二章　盗人岩洞穴遺跡……（一〇）
　第一節　遺跡の概要……（一一）
　第二節　層位と遺物……（一二）
　　一　層位……（一二）
　　二　石器……（一七）
　　三　土器……（二七）
　第三節　総括……（三二）
第三章　伊古石遺跡……（三六）
　第一節　遺跡の概要……（三七）
　第二節　住居址と堆石遺構……（三八）
　第三節　遺物……（四二）
　第四節　総括……（四六）
第四章　坂の下遺跡……（四八）
　第一節　遺跡の概要……（四九）
　第二節　貯蔵穴址……（五一）

第三節　遺　物……（五八）
一　石器および石製品……（五八）
二　土器および土製品……（六四）
三　木　材……（七四）
四　植物質製品……（七五）
五　植物質自然物……（七八）
第四節　総　括……（八一）
あとがき

付図目次

第一図　西有田縄文遺跡分布図……（四）
第二図　地形およびトレンチ図……（一一）
第三図　盗人岩洞穴遺跡地層断面図……（一三）
第四図　層位別土色模式図……（一四）
第五図　盗人岩洞穴遺跡地層断面写真……（一四）
第六図　第三層の石器……（一七）
第七図　第四A層の石器……（二〇）
第八図　第四B層の石器……（二三）
第九図　第五層の石器……（二四）
第一〇図　層位別石器組成表……（二五）
第一一図　第三層上部土器拓影……（二八）
第一二図　第三層下部土器拓影……（二八）
第一三図　第四A層上部土器拓影……（二九）
第一四図　第四A・第四B層下部櫛目文土器第一類……（三〇）
第一五図　第四A下部層櫛目文土器第二類……（三〇）
第一六図　櫛目文土器拓影……（三四）

第一七図　石槍の出土状況……（三四）
第一八図　伊古石遺跡地形図……（三七）
第一九図　住居址実測図……（三九）
第二〇図　堆積遺構実測図……（四〇）
第二一図　堆積遺構……（四一）
第二二図　伊古石遺跡出土の石器……（四二）
第二三図　伊古石第二遺跡出土の石器……（四二）
第二四図　伊古石遺跡出土の石鏃実測図……（四三）
第二五図　伊古石遺跡出土の石器実測図……（四四）
第二六図　伊古石第二遺跡出土の押型文土器……（四五）
第二七図　坂の下遺跡地形実測図……（五〇）
第二八図　坂の下遺跡貯蔵穴配置図……（五一）
第二九図　貯蔵穴全景……（五二）
第三〇図　第七号貯蔵穴……（五二）
第三一図　第一号貯蔵穴実測図……（五四）
第三二図　第二号、第三号貯蔵穴実測図……（五五）
第三三図　第四号貯蔵穴実測図……（五五）
第三四図　第五号、第六号貯蔵穴実測図……（五六）

第三五図　第七号貯蔵穴実測図……（五六）
第三六図　第一号貯蔵穴……（五七）
第三七図　第六号貯蔵穴……（五七）
第三八図　坂の下遺跡石鏃・尖頭器実測図……（五九）
第三九図　坂の下遺跡石器実測図……（六一）
第四〇図　坂の下遺跡石器実測図……（六三）
第四一図　土器出土状況……（六六）
第四二図　坂の下遺跡第一類土器拓影……（六七）
第四三図　第二類・第三類土器拓影……（六八）
第四四図　第四類土器拓影……（六九）
第四五図　第五類土器拓影……（七〇）
第四六図　土錘……（七一）
第四七図　紡錘車……（七二）
第四八図　顔面把手……（七三）
第四九図　木材……（七四）
第五〇図　笊……（七五）
第五一図　アミ……（七六）
第五二図　ヒモ……（七七）

第五三図　木の実の出土状況……（七八）
第五四図　貯蔵穴内の木の皮の出土状況……（七八）
第五五図　木の実の発芽……（七九）

第一章　発掘調査の経過

調査委員会本部の山本部落公民館

西松浦郡西有田町の西側には、標高七七六メートルの国見岳や七〇七メートルの八天岳を主峰とする山脈が屏風のように南北に連なり、東側には五五五メートルの牧山を中心に山嶺が起伏して南北にのびている。この東西の両山脈の間を有田川が蛇行して北に流れ、帯状に平地が形成されているが、この帯状の平地の川に沿つて国道や鉄道が通じている。大部分は水田となつており、水田はこの平地から東西の両側に連なる山脈の谷あいを利用して、山腹近くまで階段状に開かれている。

東西の山脈からは、舌状に多くの小丘陵が有田川へ向かつてゆるやかにのびているが、この舌状の小丘陵上には、いたるところに石器の散布が見受けられる。この西有田町の低丘陵に、石器の散布地が点在していることが明らかになつたのは、十年余り以前のことであつて、現在西松浦郡有田小学校に勤務している中原和弘教諭や西有田町山本部落で農業を営んでいる吉永直氏によつて石器の表面採集が行なわれていた。県教育委員会は、数回にわたつて係員を派遣し、採集されている遺物について調査を行わせるとともに、遺物の散布地の踏査に当らせた。その結果、石器の出土が非常に多く、また、遺跡の分布が極めて濃密であることが明らかになるとともに、遺跡の重要性が確認されるに至つた。

この遺跡群からは、ブレイド等とともに、縄文系の石鏃が多数出土している点から、縄文時代に属する遺跡群であろうということは推定されていたが、土器類の発見がないために、その遺跡群の性格については不明の点が多かつた。また、一面においては昭和三十六年八月に、西北九州総合調査の一環として、明治大学によつて発掘調査が実施された伊万里市二里町の平沢良遺跡や鈴桶遺跡などのブレイドを主体とする石器遺跡が、先土器時代に属するものか縄文時代に属するものであるのか注目されている時、地理的に近接し遺物の上から近似性が見られるこの西有田町の石器遺跡の調査を実施する必要があるのではなかろうかと考えられた。

昭和四十一年三月に、西有田町山本の坂の下の水田から吉永直氏が石器とともに相当多量の縄文式土器片を採集されたが、これが西有田町における縄文土器発見の始まりであつて、他の石器散布地からも土器発見の可能性が考えられるように

なつた。県内でも今日まで縄文遺跡の発掘調査は行なわれてはいたが、その調査はすべて規模が小さく、ごく一部分の調査に終つていた。土器が発見された坂の下遺跡は、破壊や撹乱を免れている部分がまだ相当広範囲に及んでいることが推定され、しかも、土器をはじめとする遺物の埋蔵が県内では例を見ない豊富さであり、また、県内にはほとんど発見されていない洞穴遺跡もこの西有田町に存在していることが明らかとなつたため、本県における縄文文化究明の上からこの西有田町の縄文遺跡の調査は、その重要性と必要性とが痛感されるに至つた。しかも、この西有田町でも近年柑橘園の造成が盛んになつたため、遺跡の中にも破壊され、また、調査不可能になるものも相当あらわれるという事態に当面し、緊急に調査を実施しなければならなくなつた。

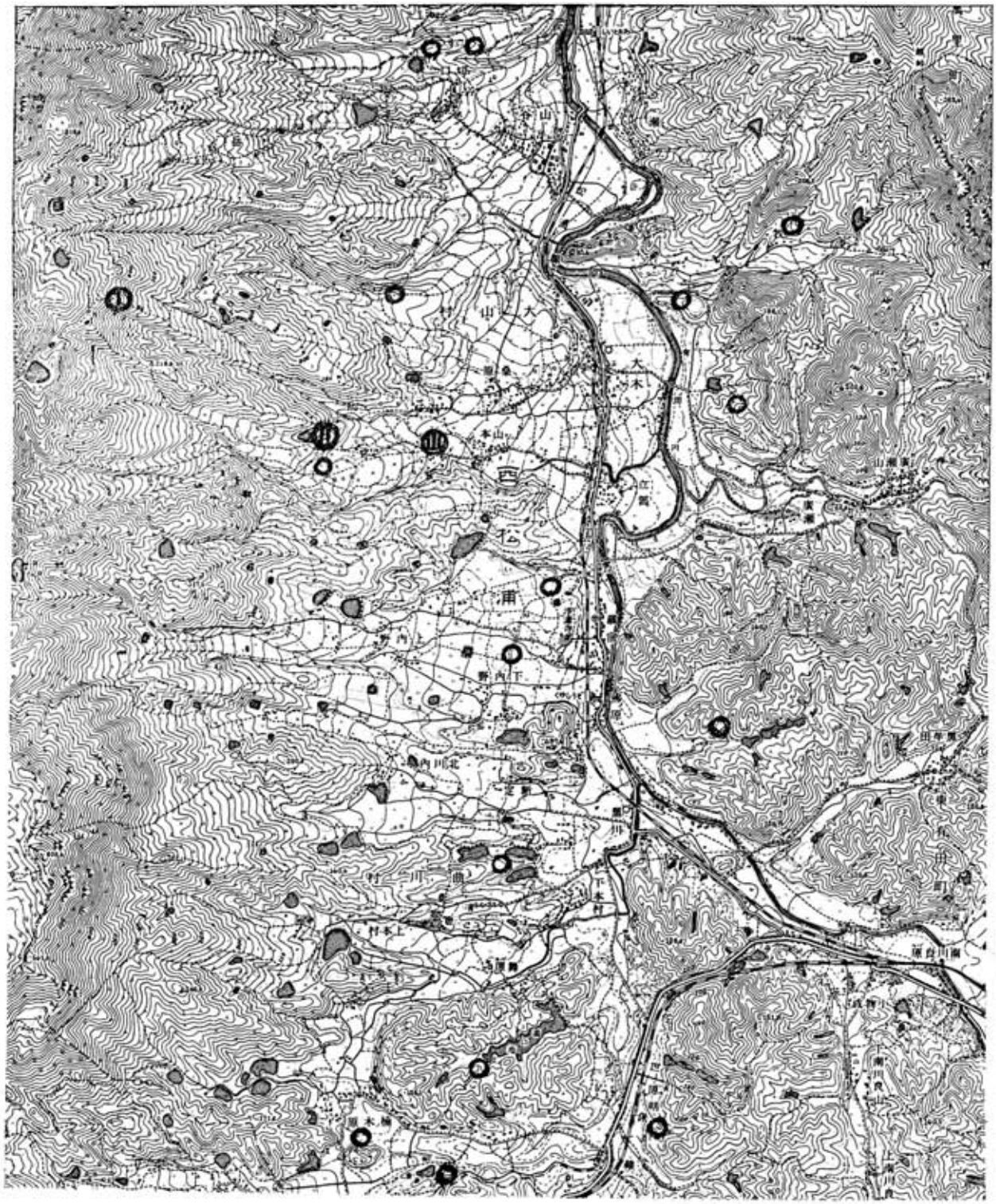
県教育委員会は、西有田町当局と協議し、国庫補助金の交付を受けて、昭和四十二年度の事業として、西有田町縄文遺跡の発掘調査を実施することになつた。この西有田町の東側の山嶺には、北から牧・鳥越・人形山南斜面・仏原東方台地・ずうめきなどの石器散布地があり、西側の山嶺には、北から切口新堤北側・上山谷北方台地・木原北東方台地・ぬすど岩洞穴・伊古石・坂の下・上内野・仏の原・上本村堤付近・赤坂・にごりぐち・上楠木原・左原などの遺跡が分布している。これらの遺跡のうちから調査上の便宜と遺跡の重要度を考慮して、ぬすど岩洞穴・伊古石・坂の下の三遺跡を調査することにした。

調査を実施した三遺跡は、西側の山嶺にあつて、標高も地形、地貌もそれぞれ異なつており、また、遺跡の性格もそれぞれに特色を有していることが考えられた。ぬすど岩洞穴は、山腹の植林中にあつて、県内では他にまだ例のない洞穴遺跡であり、伊古石遺跡は低丘陵上の早くから開かれた畑地帯に位置していて、石鏃やブレイド等の石器類が地表面にも散布しているが、付近一帯が次第に密柑園と化している。坂の下遺跡は、階段状に開けた水田中にあつて、この西有田町では最初に土器が発見された遺跡である。

第１図

西有田縄文遺跡分布図

○縄文遺跡　①ぬすど岩洞穴
Ⅱ伊古石遺跡　Ⅲ坂の下遺跡



発掘調査に当つては、西有田町縄文遺跡発掘調査委員会を組織して実施したが、その組織は次のとおりである。

委員長	九州大学文学部教授	鏡山	猛
委員	西有田町教育委員会教育長	樋渡	幸六
同	佐賀県文化財専門委員	七田	忠志
事務局長	佐賀県教育委員会社会教育課長	白浜	春次
事務局次長	同　課長補佐	西原	重一
総務係	同　庶務係長	福地	太郎
庶務会計係	同　庶務係	時貞	茂登
	同　庶務係	糸山	忠義
	同　文化財係	牟田口	英治
渉外係	西有田町教育委員会社会教育主事	岩永	徳馬
	同　公民館主事	相良	寛
調査主任	佐賀県教育委員会文化財係長	木下	之治
調査員係	同　文化財係	安本	雪男
撮影係	同　視聴覚係	中野	和
調査員	同　新生活係	柴元	静雄
	佐賀県文化館学芸課	中村	勲
	佐賀県教育研究所	木下	巧

佐賀県遺跡調査員　原口一男
同　尾形徳之
同　河児哲司
同　川内正治
同　佐々木勝
西有田町山本　吉永直
西有田中学校　森醇一朗
佐賀市教育委員会文化財係長　宮崎昌治
有明町教育委員会社会教育主事　淵上茂生
有田小学校　中原和弘
唐津市志道小学校　富樹憲次
佐賀大学考古学研究会
奥村弘・宝蔵寺博・前田武志・山口登・正木勝利・山岡繁樹・田添雅勝・古賀紀裕・堀田一男・広政直彦・瓜生治・清水兵祐・菅原セツ子・森光和子・小浦律子・権藤けい子・大場より子・木下ちさと
国際経済大学　森田和紀
別府大学　西村隆司

なお、発掘調査に際しては、調査員以外に次の人びとの協力をえた。

佐賀西高校教諭石丸虎彦・西山武人・伊万里高校教諭前山博・鳥栖工高教諭松隈嵩・大隈悟・鹿島市江頭平八・佐賀大学生沢野兵五・平増道博・原田昭二・駒沢大学生国平健三・国学院大学生山口譲治・福岡大学生石田金之・佐賀東高校生川副義信・三好覚・佐賀西高校生園田努

昭和四十二年八月二十五日午前十一時から西有田町公民館において、西有田町縄文遺跡発掘調査の鍬入れ式が挙行された。県教育委員会からは川崎教育次長・白浜社会教育課長をはじめ発掘調査関係者全員、西有田町からは大串町長・立部助役・西川教育委員長・樋渡教育長・吉永公民館長をはじめ社会教育担当者および土地所有者が出席した。

この日は、時折降雨をみる悪天候であつたが、式後調査員は発掘用具の運搬と整理、宿泊の準備などを行ない、発掘調査予定地を一通り踏査した。

翌八月二十六日から第一次の発掘調査を開始し、九月三日をもつて一応終了したが、この第一次調査においては、伊古石遺跡とぬすど岩洞穴の二か所の発掘調査を実施した。調査期間中、西有田町山本公民館分館を調査委員会本部として利用したが、調査員が多い時には近くの民家も宿泊に利用させてもらい、入浴は民家三か所に依頼し、調査員の炊事は地元婦人の協力をえた。

第一次調査期間中の日程は、次のとおりである。

起床	六時〇〇
朝食	六・三〇
出発	七・三〇
作業開始	八・三〇

休息　・二〇
昼食　一二・〇〇
作業開始　一三・〇〇
休息　・二〇
作業終了　一七・三〇
遺物整理
夕食　一九・〇〇
入浴
室内作業　二一・〇〇
作業終了　二二・〇〇
就寝　二二・三〇

天候に恵まれ、調査は比較的順調に進んだが、酷暑のため調査員の疲労は倍加した。ぬすど岩洞穴は、本部から遠距離であるため、往路のみ小型トラックを利用した。

九月三日、第一次調査終了とともに、出土遺物を調査委員会本部である山本公民分館に展示し、反省報告会を午後四時から催した。この報告会には、大串町長・樋渡教育長・樋渡町議会議員・舘林西有田中学校長・木島西有田中学校教頭・吉永公民館長の他地元代表者が集まり、調査員との意見交換も活発に行なわれ、午後七時に終了し、調査員は全員引揚げた。

九月五日から十日まで、六日間にわたつて、木下・安本・牟田口・柴元・森・淵上の調査員は、遺物の実測と整理に当り、九月十日をもつて第一次調査を完全に終了した。十日には、西有田中学校の生徒の協力をえて、西有田町全域にわたつ

て石器類の散布地を調査し、遺物の表面採集を実施した。

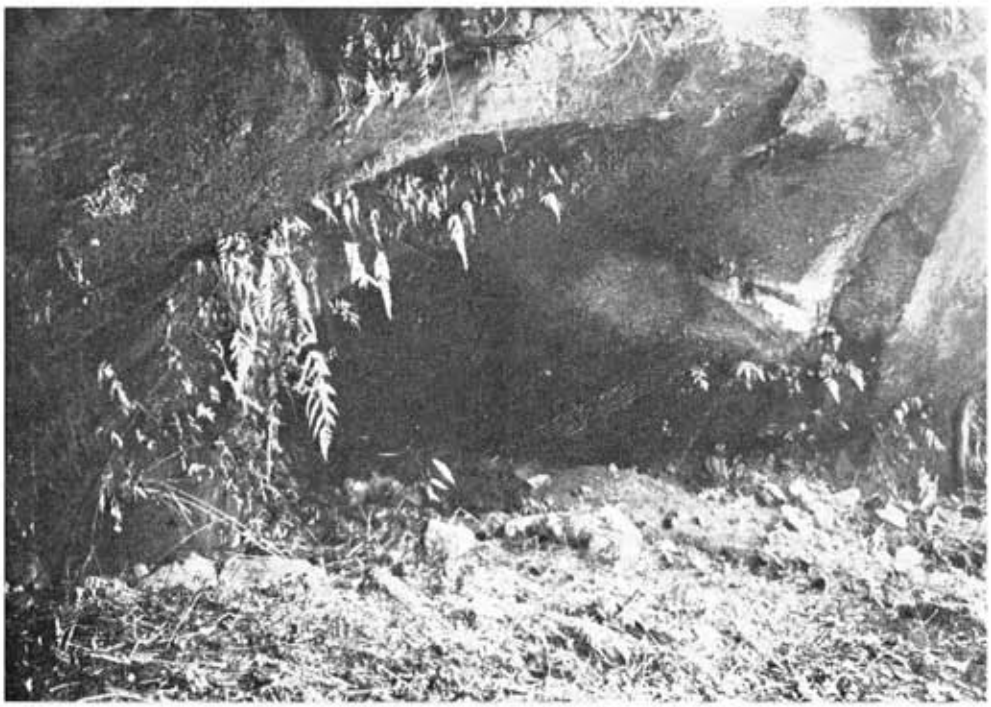
第二次調査は、坂の下遺跡を対象として、十一月二十七日から十二月九日まで実施したが、気温がさがつて寒く、しかも湿地帯であつたため調査は相当に難渋した。十二月六日から発掘と一部埋戻し作業を併行して実施し、七日・八日の二日間は、実測と埋戻し作業を行ない、八日には現地での作業を完了した。九日には、道具と遺物の整理をなし、午後は第二次調査の出土品を山本公民館分館に展示するとともに、町長・町議会議長・教育長・公民館長をはじめ地元関係者を呼んで報告会を催し、調査期間中における地元の協力について感謝の意を表した。報告会が終了するとともに調査員は、全員現地を引揚げた。

十二月十八日、出土遺物の整理を行ない、十九日から二十三日まで西有田町公民館において、西有田町縄文遺跡発掘調査展示会を開催した。一般町民や小・中学校生などの参観があつて、有意義に終了することができた。

発掘調査地が三か所にわたつたため、各遺跡の調査が十分ではなかつた。ぬすど岩洞穴では、未発掘の部分を残し、今後の再調査を期待せねばならなくなり、伊古石第二遺跡では、二本のトレンチを設定しただけに終つたため、堆石遺構の性格を十分に究明することができなかつた。また、坂の下遺跡においては貯蔵穴の調査のみに終り、遺跡の全体を究めることができず住居跡の調査などは、今後の調査にまたねばならなくなつてしまつた。

出土した遺物も石器・土器の他、木の実や木材あるいは植物質編みかごなど多種で、しかも出土遺物数も多く、これが整理に相当の期間を要した。遺物の整理は、主として森醇一朗が佐賀大学考古学研究会員の協力をえて実施した。

第二章　盗人岩洞穴遺跡



発掘前の盗人岩洞穴

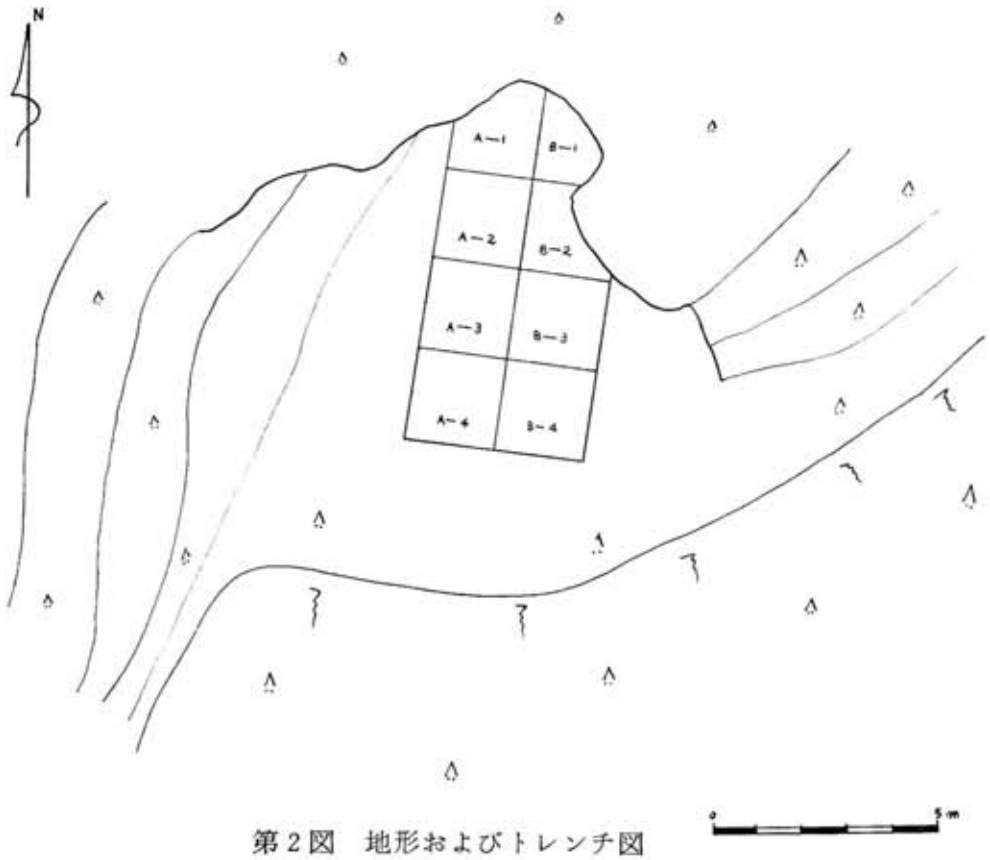
第一節　遺跡の概要

東を佐賀県、西を長崎県に二分する国見山系の裾野、標高三六〇メートルの中尾岳の山中に盗人岩洞穴は位置する。

正面に伝説で知られる黒髪山の岩肌が夕日に霊気を漂よわせ、東には以前火山活動を行なつていた腰岳がなだらかなスロープを描き、地元民には「松浦富士」として愛称されており、昭和三十六年の日本考古学協会西北九州調査特別委員会の調査によつて、黒曜石の原産地として広く学会に知られたのである。

南には太良岳の山なみが連なり、さらに黒髪山のかなたには背振の山々がかすかに見える。眼下には黒髪山に端を発した有田川の清流が、有田町・西有田町・伊万里市内を蛇行し、伊万里湾に流れ込む。

洞穴は前記のように視界の非常によくきく、急角度の南斜面の県有林の杉林の中に位置し、砂岩の風



第2図　地形およびトレンチ図

化によつて形成されたもので、南面に向つて開口している。

洞穴の形態は横幅約十二メートル、奥行約六メートル、高さ約五・二メートルの比較的小さな洞穴である。

洞穴の前面は平坦な部分が約百平方メートルあり、洞穴の最奥部より十一・五メートル前方では約四五度の角度で傾斜し、洞穴の左の西側は五十度の角度で登つており、さらに右の東側も同様な急角度で上昇する。

この洞穴の東側約百メートル離れた地点に大旱魃でも湧水を出す水源があり、この湧水源が高地の洞穴生活を可能にしたものと思われる。

発掘調査地点は洞穴の中央部の南北に2×8メートルのAトレンチと、Bトレンチを設定し、一区画2×2メートルで北より1～4区まで区切り、合計八区画のトレンチを設けた。さらにAトレンチとBトレンチの境に幅三〇センチメートルの壁を残し、これを断面とした。洞穴の表面は奥より前面、北南に向つて傾斜し、洞穴の前面は西から東に向つて傾斜している。

調査以前は洞穴の中まで雑草が生い茂り、洞穴の開口部分は上からカズラがカーテンのように垂れ下がつていた。

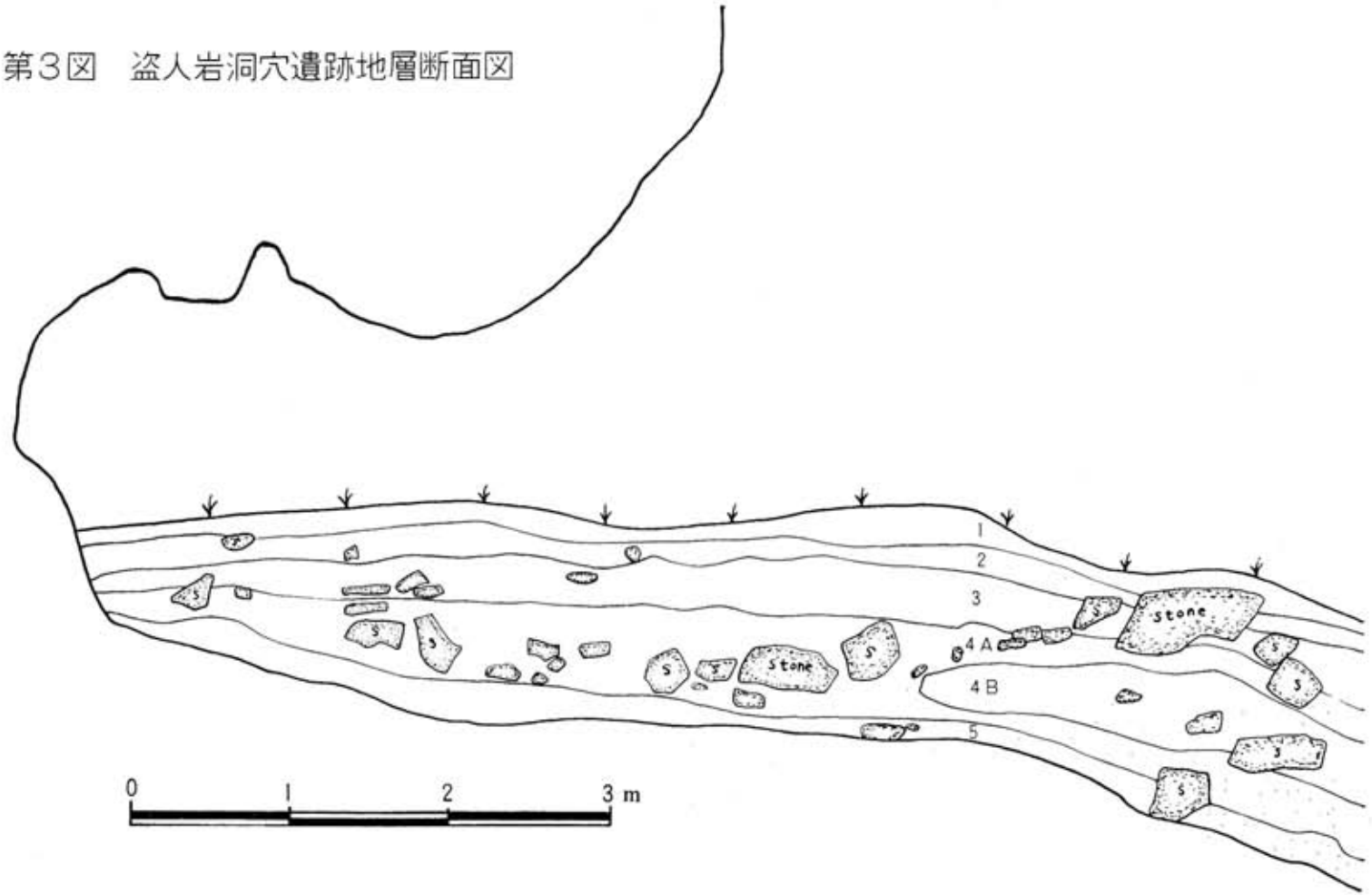
第二節　層位と遺物

一層位

洞穴の現在の表面は西から東へ、北から南へ向つて傾斜し、洞穴のほぼ全面に表土が堆積しており、地表と洞穴の天井との最低高は一・五メートルである。層位は全部で六層に分離できるが、その中でも文化層は上部の二層を除き、四層のみが遺物を出土するいわゆる生活層である。

第一層は表土層で撹乱され、洞穴の前方部は木の根が一面に覆つており、木の葉が腐蝕してできた黒褐色のひじよ

第３図　盗人岩洞穴遺跡地層断面図



うに軟らかい土質である。層位は比較的薄く、遺物は一点の出土も確認できない。

第二層は昭和二十三年の大水害によつて、洞穴の北側より流れ込んだ土で形成され、全面に小礫が混入しており、なお出土遺物は第一層と同様確認できない。

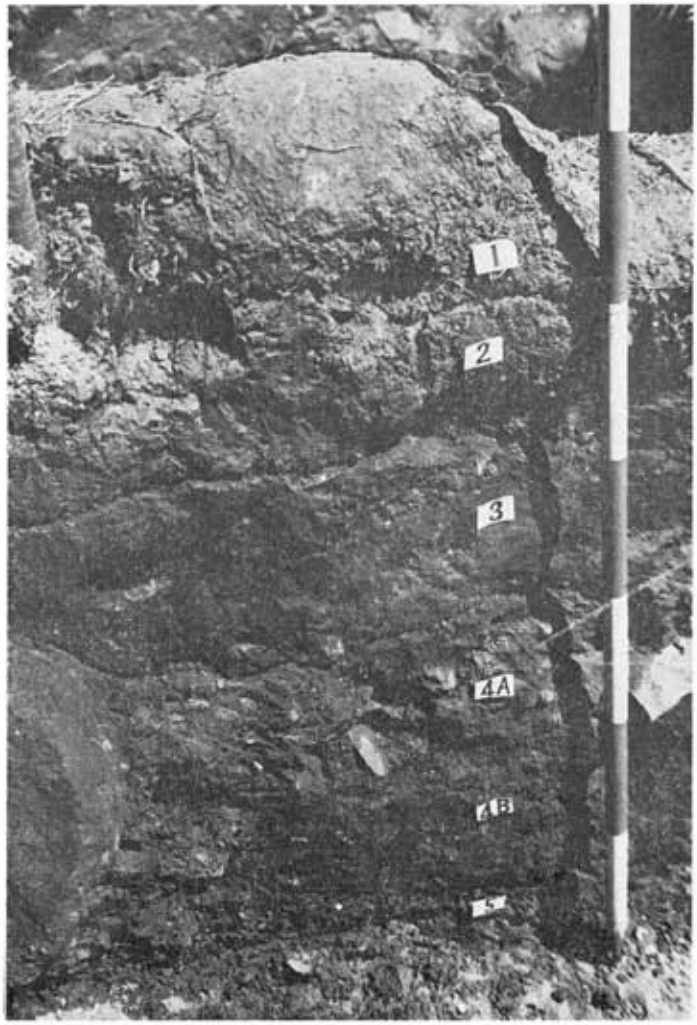
第三層は土がひじように黒色を帯び、第三層に変化をすると同時に遺物の出土が確認される。よつて昭和二十三年の水害によつて、第三層の上層の一部の層が流出したことも考えられる。まずこの層の最上部で確認された遺物は、剝片を簡単に

第4図　層位別土色模式図

第 1 層	表　　土	
第 2 層	昭和23年水害流入土層	
第 3 層	黒褐色土層	(Mc35)
第4A層	帯赤褐色土層	(Mc90)
第4B層	暗帯赤褐色土層	(Mc84)
第 5 層	濁黄橙色土層	(Mc27)
基　盤	砂　　岩	

※日本土壌協会、基準土色帳による。（番号は土色を表わす。）

第5図　盗人岩洞穴遺跡地層断面写真



調整した石鏃（剝片鏃）である。さらに剝片鏃と共に幅の比較的狭い、縦長の剝片が多数出土している。

これらの石器に伴う土器としては中期の阿高式土器系が共伴しており、後期の土器（型式判定不可能）も出土している。

第三層下部になると面を丹念に磨いてある半磨製石鏃が出土する。このように剝片鏃と半磨製石鏃の出土状況が分離できることは注意をかたむける必要があろう。一方打製石器は万遍なく各層位に関係なく出土する。

第四層は二層に分離でき、最初第四A層の帯赤褐色土層を第四層とし追求していたが、洞穴の前方部五・二メートルの地点で帯赤褐色土層の中に「レンズ状」に暗帯赤褐色土層がはいりこんでおり、これを分離し、帯赤褐色土層を第四A層、暗帯赤褐色土層を第四B層としたのである。

第四A層は洞穴奥壁より五・二メートルまでは単一層であるが、ここで第四B層がはいり込み、第四A層が第四B層を「サンドイツチ」する状態になつている。さらにこの層が一番落石が多く、この洞穴最大の地盤変化の時期であろう。出土遺物は第四A層上部で楕円押型文、山形押型文が少数ではあるが出土し、これに伴なつて半磨製石鏃が出土しており、また、平沢良・鈴桶両遺跡で発見されている石核や、前記両遺跡発見の石刃より少々小形の石刃が多数出土している。

第四層下部と第四B層下部に、特異な文様をもつ土器として、櫛目文土器が多数出土しており、土器としての出土はこの櫛目文が一番多い。

第四B層は洞穴前方部五・二メートルから第四A層に「レンズ状」にあり、洞穴の奥部には存在しない。出土遺物は第四A層と同一類であり、洞穴奥壁より五・二メートル前方部に出土遺物が著しく出土しており、第四B層の下部より櫛目文土器が多数出土する。

第五層は基盤直上の層で、砂質を含む濁黄橙色土層で、一部灰色土層をなしており、水分を多く含み、砂質の小礫を混入する。出土遺物は石槍がひじように多く出土し、形態はまちまちである。さらにこの石槍に伴なつて隆起線文と思われる土

器が出土しているが、磨耗がはげしく確定することは困難である。

第五層の下が砂岩の岩盤で、洞穴前方部に向かつてなだらかに傾斜し、奥壁より約七・五メートルの地点から三五度の角度で傾斜する。今回の調査で奥壁より八メートルの地点まで発掘したが、洞穴前方部に遺物が集中しており、さらにその前方部になると遺物の出土が多量ではなかろうかと思われる。

二　石　器

(一)　第三層の石器　〔第六図1～30〕

三層出土の石片の大部分は黒曜石で、ごく少量のサヌカイト及び頁岩などが見られる。この層からは阿高系土器が出土するが、特徴的な共伴石器として剝片鏃が見られる。代表的なものを器種毎に概説すると、

イ　剝　片　鏃　〔1～7〕

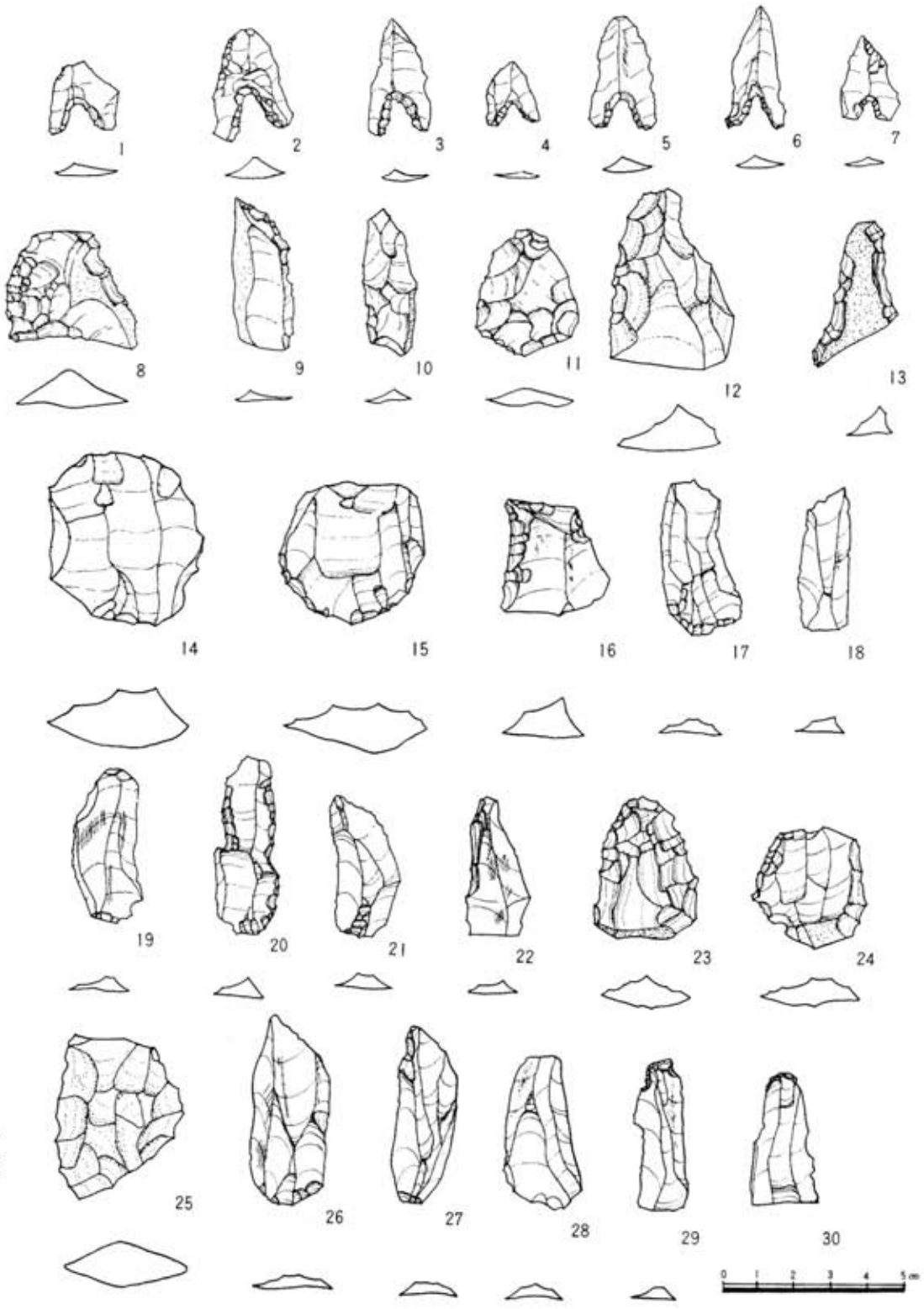
いずれも黒曜石製で、縦長剝片を使用している。基部には抉り込みをつくり、1、2、7では先端部縁辺に加工が見られる。阿高系土器を主体とする坂の下貯蔵穴遺跡の剝片鏃に酷似する。

ロ　尖頭状石器　〔11、12、23〕

いずれも黒曜石製で、不定形な縦長剝片を使用している。11はやや扁平で、両面に調整が見られるが基部がやや密である。先端を一部欠失している。12は粗い片面調整で、先端部を欠失する。23は基部と先端部表面の一部に自然面を残しているが、両面ともにやや密な調整を施している。

ハ　掻　　器　〔9、17、19、20、25、26、29〕

いずれも黒曜石製で、17、27は先端部を入念に加工して刃部を形成した最も形のととのつたものである。20は辺の一端に抉り込みを形成し、25は幅広で、部厚な縦長の剝片に粗い両面調整を施している。9、19、26、29は刃器状の剝片


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
0 1 2 3 4 5cm

第6図　第　3　層　の　石　器

を素材とし、一端に調整を加えて掻器となしている。この他、三層の掻器の大部分は黒曜石製で、いずれも縦長の不定形剝片を素材にして、粗い加工をしたものが多い。黒曜石以外にはサヌカイト、頁岩製のものが若干見られる。

ニ　削　器〔8、13、16、22、27〕

8と13は表皮を残した剝片で、側辺に粗い調整で刃部を形成する。16は幅広で、やや部厚な剝片の一辺と他辺先端部に刃部を形成する。22、27は刃器状縦長剝片の一側辺先端部に僅かに刃部を形成する。このほかに第三層の削器はいずれも不定形縦長剝片を使用しているが、幅広で部厚なものと、刃器状のものに大別される。

ホ　刃器・刃器状剝片〔18、19、21、28、30〕

三層では12点検出されたが、いずれも黒曜石製である。一般的な形として、幅の広さに対して短小である。30のように並行する縁と稜をもつ整ったものもあるが、大部分は不規則である。

ヘ　石　核〔14、15〕

石核の原石は残された自然面から、腰岳の角礫状の黒曜石を使用したことがわかる。剝離痕は三ないし四であるが、それは左右両端中央の順序を示している。一応の調整打面が見られる。

(二)　第四A層の石器〔第七図31～91〕

第四A層出土の石器は大部分が黒曜石製であるが、ごく少量のサヌカイト、砂岩および粘板岩製の石器も出土する。この層の石器は上部に押型文土器を、下部に櫛目文土器を共伴する。

器種毎に代表的なものを概観すると

イ　石　鏃〔31～79〕

サヌカイト製6点（35、40、41、42、65、66）を除いて他は黒曜石製である。その中、4点（32、57、58、78）は乳

白色を呈する。技法上大別すると、打製石鏃、磨製石鏃、剥片鏃の三つに分類されるが、磨製は5点〔34、39、54、67、79〕、剥片鏃は1点〔49〕にすぎず、大部分が打製石鏃である。このことは第三層の石鏃が剥片鏃のみであつたのと対照的である。

形態上大別すると、①、底部に彎曲がなく尖頭器状をなすもの〔34、36、41、44、47、52、54、55、56、76〕②、底部がやや彎曲するもの〔32、46、49、57、58、67、72〕③、底部が鋭角的に抉り込まれ、脚端の尖つたもの〔45、51、63、68、69、70、73、74、75、78〕④、底部が梯形状に彎曲し、脚端の尖つたもの〔31、33、53、77、79〕⑤、底部が梯形状に彎曲し、脚端が切断された如き形状のもの〔51、59、71〕に分類される。

この中、⑤型式の石鏃は楕円押型文土器に共伴する事が一般的であるが、この洞穴でも同様である。

ロ　石　錐　〔91〕

黒曜石製で、不定形剥片の先端を両面から入念に加工している。

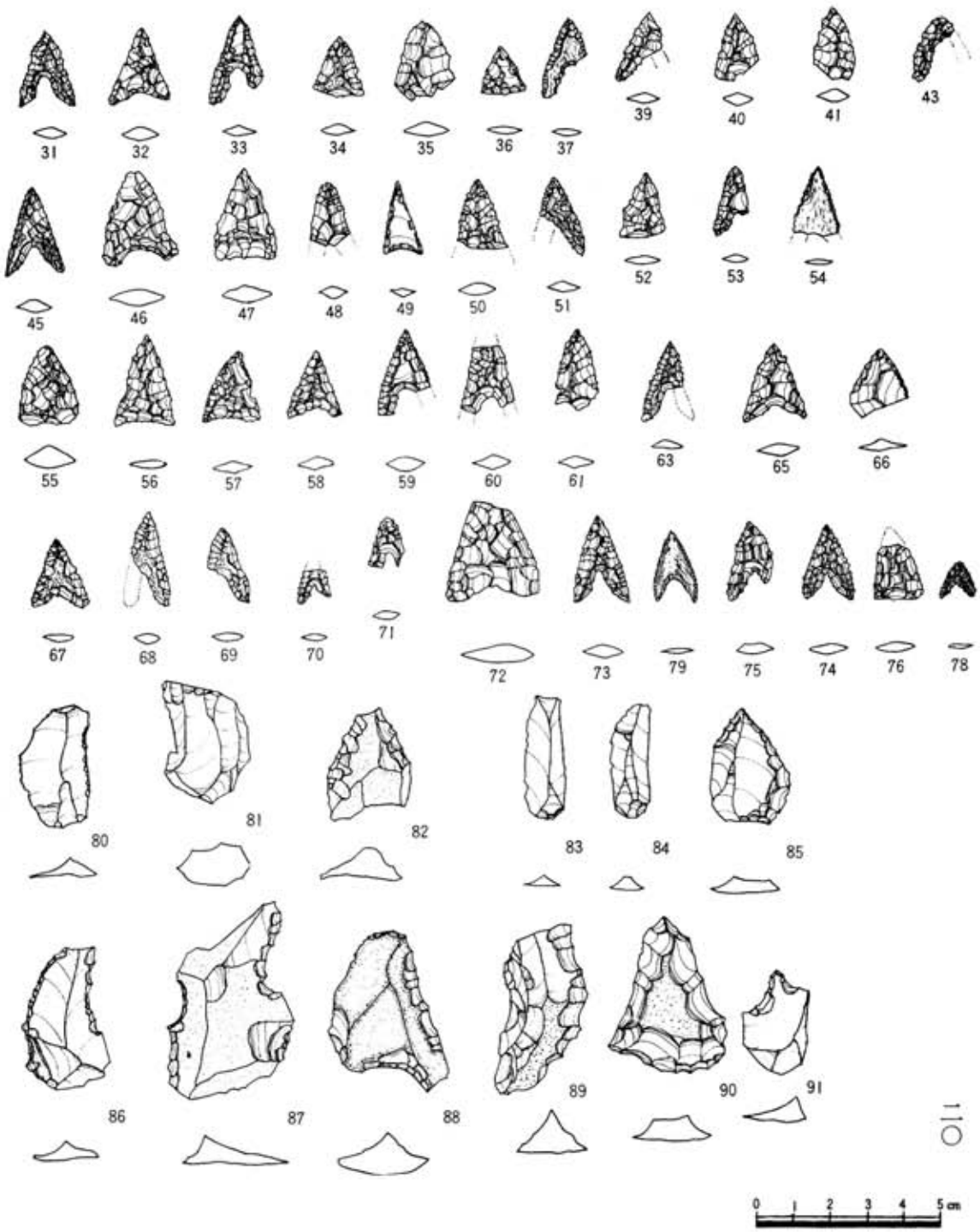
ハ　尖頭状石器　〔85、90〕

いずれも黒曜石製で、不定形縦長剥片の縁辺を加工し、尖頭部を調整している。ともに片面加工で、90は一部に自然面を残している。

ニ　掻器および削器　〔80、82、86、87、88、89〕

88は表面は自然面を有する不定形の黒曜石剥片の縁辺にそれぞれ加工を加え刃部を形成した掻器である。82は安山岩、他はすべて黒曜石製の削器である。80、86、89は刃器状縦長剥片の両側辺や一辺に調整を施し刃部を形成するいずれも片面加工である。87は不定形剥片の彎曲部に抉り入りの刃部を形成し、自然面を多く残す。

ホ　刃　器　〔83、84〕


31
32
33
34
35
36
37
39
40
41
43
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
63
65
66
67
68
69
70
71
72
73
79
75
74
76
78
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
1/1
0 1 2 3 4 5 cm

第7図　第 4 A 層 の 石 器

黒曜石製で、稜と縁は並行し、三層のものに比し狭長で、整つている。

ヘ　石　　核〔81〕

第三層出土の石核と同じ技法によるものと思われる。

ト　図示しなかつたけれども、この層から粘板岩製の凹石と砂岩製の磨石が出土した。いずれも約半分を欠損している。

(三)　第四B層の石器〔第八図92～110〕

この層は櫛目文土器を包含する。石器は三・四A層に比して量的に約半分である。代表的なものを器種毎に概観するとイ　石　　鏃〔92～102〕

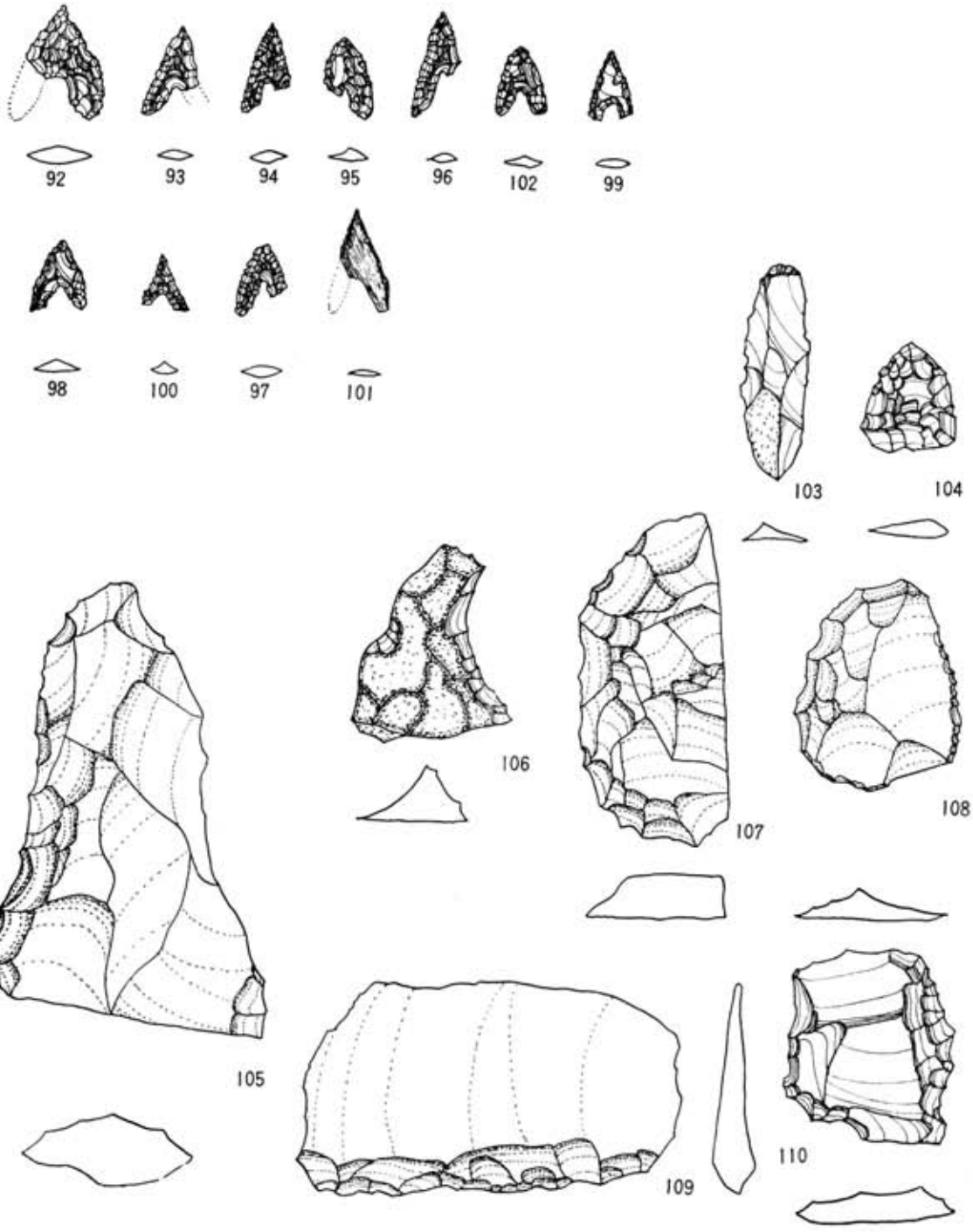
102のサヌカイト以外はすべて黒曜石製、磨製は101のみで、剝片鏃は見られない。形態上も第四A層とは異なり、底部の抉り込みは鋭角なものは少なく、梯形との中間を示す。大きさも、半数は長さ二センチメートル以下である。鏃形石鏃・二等辺三角形を示すものは見られない。第四A層との時間的相違が考えられる。

ロ　尖　頭　器〔104、105〕

104は黒曜石製で、全面に細かな加工が施されている。両面加工である。105は安山岩の縦長剝片に粗い加工が施され、盗人岩出土中、最も大型のものである。両面加工。多久市三年山遺跡の尖頭器技法に類似している。

ハ　掻器および削器〔106、107、108、109、110〕

107は横長の安山岩剝片の片面加工で刃部を形成した掻器で、この遺跡では例外である。108は黒曜石の幅広い縦長剝片の打撃部と側辺に加工を施した掻器である。106は黒曜石の縦長剝片、自然面の側辺部に加工を施し、彎曲した刃部を形成した削器である。109は安山岩の幅広く、扁平な縦長剝片の一側辺に加工を施して刃部を形成した削器で、この遺跡


92
93
94
95
96
102
99
98
100
97
101
103
104
106
107
108
105
109
110
0 1 2 3 4 5cm

第8図　第 4 B 層 の 石 器

では特異なものである。110は黒曜石の幅広く、扁平な縦長剝片の両側辺に加工を施し、刃部を形成した削器である。

ニ　刃器状剝片〔103〕

自然面を一部残し、稜と縁は並行しない不定形である。刃器状掻器に近いと思われるが、一応ここに分類する。

(四)　第五層の石器〔第図111～126〕

第五層の特徴的石器は、両面にわたつて微細に剝離調整された石槍である。第三、第四A、第四B層では全く検出されず、この層にのみ包含される。共伴する土器は磨耗のため判然とはしないが、隆起線文土器と思われる。

イ　尖頭器〔113、117〕

113はサヌカイト、117は黒曜石製で、いずれも縦長の剝片を使用している。117は並列的に細かく剝離調整されるが、サヌカイト製の113はやや粗い調整である。いずれも第一次剝離の打撃痕は消去している。

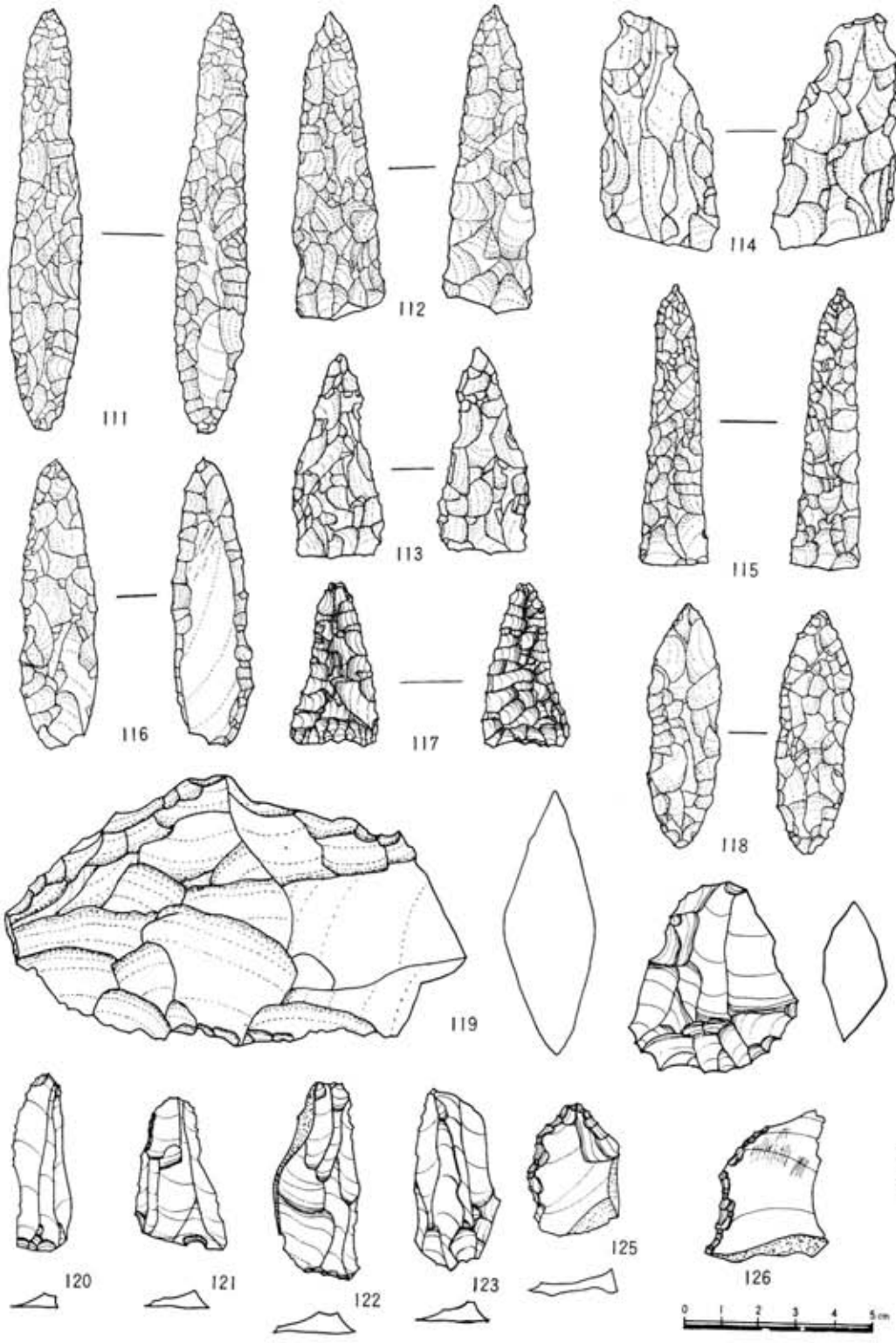
ロ　石槍〔111、112、115、116、118〕

いずれもサヌカイト製で、縦長剝片を使用し、押圧剝離で両面を微細に調整している。中でも115、117は微細をきわめ、肌面は平滑を呈しているが、緩い稜を縦貫させる。112、115は中央部での欠折物ではなく、意識的に尾部が断ち切られたものと思われる。

大きさは111が最大で、116が標準である。形態的にはすべて葉状であるが、それぞれ若干の相違が見られる。磨耗痕は剝離の微細な111、115に特に著しい。

ハ　掻器および剝器〔114、119、125、126〕

いずれも黒曜石製の不定形縦長剝片を使用している。125は一部自然面を残し、先端に刃部を形成した掻器である。114は側辺の一部に粗い二次加工を施した両面加工の削器。119は部厚い、幅広の縦長剝片の側辺に粗い加工を施した両面加


111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
125
126
0 1 2 3 4 5cm

第9図　第　5　層　の　石　器

工の大型削器。126は自然面を一部残し、一側辺に彎曲する刃部を二次的に形成した削器である。大型のもの程、整形的加工の意図が強く、小型の場合はむしろ、刃部形成を明確に意図しているように思われる。

ニ　刃器、刃器状剝片〔120、121、122、123〕

いずれも黒曜石製である。120は二本の稜と縁が並行するが、他はいずれも不規則であり、122では自然面を側辺に一部残している。これは、縦長の刃器に近い剝片を求めたにもかかわらず、完全な石刃技法によらない剝離に起因すると思われる。

層位 / 土器 / 器種	第3層	第4A層	第4B層	第5層
	阿高	(上)押型文 (下)櫛目文	櫛目文	隆起線文
石鏃	8	48	11	
石錐		1		
尖頭器 尖頭状石器	5	7	4	3
石槍				8
掻器	22	18	9	10
削器	18	22	9	7
刃器・剝片 刃器状剝片	13	15	3	7
石核	3	3		1
磨石		1		
凹石		1	1	1
剝片石片	多数	多数	若干	若干

第10図　層位別石器組成表

ホ　石核〔124〕

第三層出土の石核と同じく、不定形の平沢良型石核である。

(五)　総括

この遺跡の層位別石器組成は上表のとおりであるが、ここにあげた以外にも採択すべき剝片は更に多いかも知れない。しかし、石核に見る如く、技法的に不定形なものが多いので、その認定がむずかしく、比較的に形の整つたもののみを厳選したからである。

とは言うものの、この類別は盗人岩洞穴遺跡のごくおおまかな石器の性格を示していると言えよう。この遺跡の未発掘部分の調査が将来実施された時には、質、量

共に今回の調査で不十分な点も補正されるものと思う。

前項までに層位別に、個々の資料について具体的に説明してきたが、ここでそれを総括的に整理すると次のようになる。

一、盗人岩洞穴遺跡の石器群は各層とも、腰岳の黒曜石と密接な関係がある。

二、第三層の阿高系土器文化には剝片石鏃が特徴的である。

三、第四A層の押型文・櫛目文土器文化には打製石鏃が特徴的で、鍬型石鏃を含む。

四、第三層、第四A層を通じて、他の石器の量も豊富である。

五、第四B層の櫛目文土器文化では、小形石鏃が多く、掻器・削器には大型で粗い加工のものが多い。

六、第五層の隆起線文土器文化？では、微細な押圧剝離を施した石鏃が特徴的で、尖頭器も定型化したものが多い。掻器・削器には大型で粗い加工のものが多い。石鏃は一本も検出されない。

七、第四B層、第五層を通じて他の石器の量が著しく減少する。

八、「平沢良型」と称される剝離技術が、石核、剝片に見られ、不定型な石器を作り出している。

九、小瀬ガ沢洞窟遺跡の隆起線文土器＋石槍、櫛目文土器＋石槍の組成が、盗人岩洞穴では隆起線文土器＋石槍の組成を示し、第四B層の櫛目文土器とは共伴しない。これは地域的な差異に基づくものと単に解してよいだろうか。

十、この遺跡には、県内各地に数多く発見されているナイフ型石器の出土が見られない。このことは長崎県福井岩陰遺跡に共通している。

以上、個々の資料、他遺跡との比較など十分な検討を果さず、非常に粗雑な総括となつたが、当遺跡の残存部分の調査により、この粗雑さも補正される事を念じる。

参考文献

駿台史学十二号、杉原荘介、戸沢充則「佐賀県伊万里市平沢良の石器文化」
八幡一郎・賀川光夫「早水台」
考古学集刊三～一、鎌木義昌・芹沢長介「長崎県福井岩陰」
中村孝三郎「小瀬ケ沢洞窟」
佐世市教育委員会「岩下洞穴の発掘記録」
平凡社「日本の洞穴遺跡」
雄山閣「考古学講座3」
河出書房「日本の考古学2」「日本の考古学1」
大分県教育委員会「黒山遺跡緊急発掘調査」
有光教一「朝鮮櫛目文土器の研究」

三　土器

(一)　第三層上部（図一一）

第三層上部で文様を持つ土器は一点のみで、他に無文土器が少数出土している。この土器は胎土に多量の滑石を混入しており、焼成は比較的良好で、口縁の縁は波状をなし、文様は口縁部のみにヘラ状の施文具で掻いたような文様で、熊本県阿高貝塚出土の土器に比定でき、縄文時代中期に編年的位置ずけされている土器と同類である。

(二)　第三層下部（図一二）

第11図　第三層上部土器拓影（1/1）

第12図　第三層下部土器拓影（1/1）

第三層下部において文様をもつ土器片は、この貝殻条痕文土器一点のみである。

九州における貝殻条痕文土器は、普通、熊本県轟貝塚出土の土器を標準として「轟式土器」とよばれるものである。

現在使用されている轟貝塚出土の土器型式名は古い順に、轟A式・轟B式・轟C式・轟D式の記号を用い四型式に分類されている。当遺跡出土の貝殻条痕文土器は轟A式に比定されるもので、胎土には砂質を多く含むが、焼成が良いため文様もはつきり残つている。

文様は「ハイガイ」を施文具に使用し、貝の背の「凸凹」を利用し、表裏全体に深い条痕文を施しており、不整いの粗い文様で施文すると同時に、土器面の調整を行なつたものと思われ、後者の器面調整の目的が強い感じを与える。

(三)　第四A層上部（図一三）

押型文の施文方法は、断面がほぼ円形の棒状の工具を使用し、この施文工具に黒曜石の石器を用い種々の文様を刻み、施文された棒状の工具（施文工具）を半乾きの柔かい土器面に当て、強く押し、回転（回転押圧）する方法である。さらに施文原体を用い文様を土器面に装飾するのみでなく、土器面調整の役割をも兼ねたものと思われる。

九州における押型文土器の文様構成は大きく分け、次の三種類に大別される。

一、山形押型文

一、楕円押型文

一、格子目押型文

当遺跡においては他遺跡発見の押型文と大差はなく、出土量は少ないが楕円押型文土器を第一類、山形押型文を第二類と分類した。

① 第一類（楕円押型文土器）

第一類の楕円押型文土器は二点出土し、1は文様がほぼ円形をなしており、文様の粒も比較的小さく整然と施文され施文原体に規則正しく調刻されたものと思われ、胎土も粘土質の土を使用し、比較的高温度で焼成されたものと思われる。2の文様は不整いで、一見すると山形文に見えるが楕円をなしており、土器面が半乾きの柔かい時期に施文原体を強く回転押圧した形跡があり、文様がつぶれている。胎土には砂質を多量に含み、たいへんもろく焼成も低温度のように思われる。

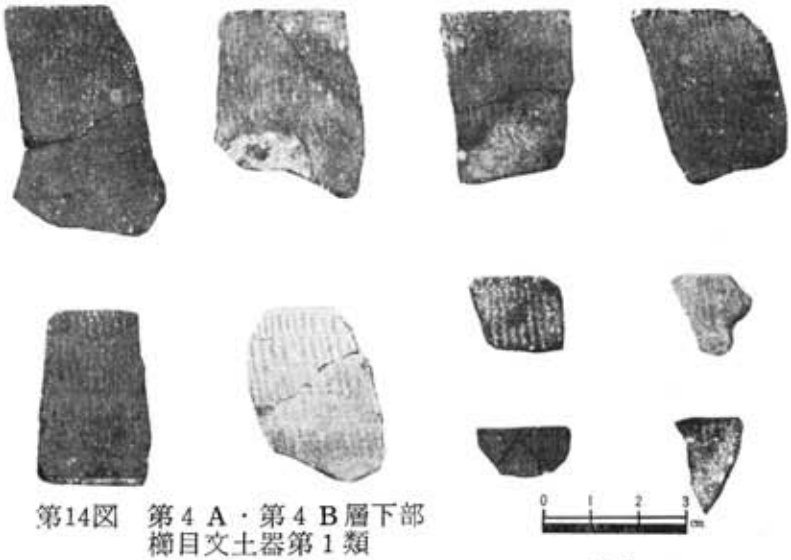
第13図　第4A層上部土器拓影（1/1）

② 第二類土器（山形押型文土器）

第二類土器の山形押型文は第一類土器の楕円押型文

と同様二点のみの出土である。

1、は口縁部のみに山形文様が施文されて、口縁部より胴部にしたがって文様が薄くなっており、文様不整いである。器形は不明であるが、口縁はやや外反しており、胎土は粘土質の土で、高温度で焼成されたようで、たいへん硬い。当遺跡出土の押型文土器の中でも一番下層より出土している土器である。



第14図　第4A・第4B層下部
櫛目文土器第1類

2は1に比べ文様は整然としており、刻みも深くはっきりと施文されている。土器断面は厚く、胎土には多量の砂質を含み、たいへんもろい土器である。

(四)

第四B層下部・第四A層下部（櫛目文土器）

当遺跡は第四B層下部・第四A層下部の土器の出土が一番多量で、文様は二種類からなっており、第一類土器は第四B層下部・第四A層下部から出土し、第二類土器は第四A層下部より一点のみ出土している。

第15図
第4A下部層櫛目文土器
第二類（$\frac{1}{2}$）

①　第一類土器（図一四）

第四A層下部、第四B層下部から出土する土器文様のほとんどが、この文様をもつ土器であり、黄褐色を呈し、胎土には砂質を多量に混入しており、たいへんもろい土器片である。口縁は平縁であ

り、器形は尖底もしくは丸底をなすものと思われる。

文様は整然と施文され、二本以上の歯をもつ櫛状の施文具によって、口縁部より垂直もしくは右よりの角度で五段に区切つて、口縁部五センチメートルほど施文されており、西北九州においては現在のところ発見例がなく、特異な文様をもつ土器である。

② 第二類土器（図一五）

第二類土器は第四A層下部より一点のみ出土したもので、器面全体に「スス」が付着しており、焼成・胎土・器形・施文具等はほぼ第一類土器と同一であると思われるが、施文方法に異なる点がうかがわれる。

第一類土器は櫛状の施文具によつて、土器の口縁部をなで下した「有線文」であるのに対して、第二類土器の文様は施文具を土器面に突き刺した「刺突文」である。第一類土器が五段に区切つてあるのに対して、第二類土器は三段に区切つてある。

以上のことから第一類土器と第二類土器の文様構成は、点と線に異るが、施文具は同一のものであり、九州においても特異な文様であるところから、これを一応「西有田式」と仮称しておく。

（佐賀県内における押型文土器出土地）

1 西松浦郡西有田町中尾岳　盗人岩洞穴遺跡
2 西松浦郡西有田町山本　伊古石A遺跡
3 西松浦郡西有田町山本　伊古石B遺跡
4 西松浦郡西有田町山本　矢杖台地遺跡
5 伊万里市二里町大里　白幡台地遺跡
6 伊万里市東山代町脇野　白蛇山岩蔭遺跡
7 唐津市　西唐津海底遺跡
8 唐津市枝去木　分校入口遺跡
9 唐津市佐志町　笹の尾遺跡
10 東松浦郡相知町　千束遺跡

11　多久市西多久町　綿打遺跡
12　小城郡三日月町　龍王遺跡
13　神埼郡東背振村字三津　戦場ケ谷遺跡
14　神埼郡三瀬村字藤原　狂言平遺跡

第三節　総　括

国見連山の裾野に位置し、黒曜石の原石を産する腰岳に近接するこの盗人岩洞穴遺跡は生活利器である石器の原料が労せずして手に入り、洞穴の周囲は「山の幸」が生息し、ひと走り山を下れば有田川の「川の幸」が取れ、川を丸木舟で下れば波静かな伊万里湾の「海の幸」が簡単に手にはいるという、自然物採集経済下の原始時代において、南面に開口しているこの洞穴は天然の住居として最適の地であつたにちがいない。

前記のような自然環境により、有田川の流域の河岸段丘上に多くの遺跡が点在することが知られているが、この盗人岩洞穴遺跡と編年的に系統だつた遺跡が存在せず、さらに県内においても比較検討される遺跡もほとんどない状態であり、腰岳の裾野に位置する平沢良、鈴桶両遺跡以外には遺物包含層が確認されていないのである。

しかし盗人岩洞穴遺跡の今回の発掘調査で多くの問題を提起し、西北九州縄文時代編年に有意義な資料を導き出したのである。

まず特記できることのひとつに、盗人岩洞穴では土器の出土量より石器の出土がはるかに多量であることで、山間部の住居であるところから、石器の武器で動物を取り、肉食生活が主であつたものと思われる。

土器は細片であり、器形すら推定復元の可能性は全くない。しかし土器の出土は微量であるが、特異な文様を有する。

上層出土の土器は胎土に多くの滑石を混入し、波状口縁で太い沈線文が口縁部のみに施文されており、縄文時代中期に位置するものと思われ、九州全域に分布圏をもつ時期のものであるが、西北九州、特に玄海灘に面する遺跡より出土する土器

に滑石の混入が著しいようである。当遺跡では出土例が少ないが、眼下の坂の下遺跡では同類の土器片が発掘面積に対して莫大な量を出土しており、中期になると生活の場所が山間部から平地に下つたことを示しており、洞穴に土器が少ないところから、「山の幸」を求めて山中に狩りに登つた時に一時的に使用したものと思われ、坂の下遺跡やその近接地で多量発見されておる剝片鏃が多数共伴している。

この中期に類する文様の土器は、県内においては唐津市の西唐津海底遺跡、東松浦郡鎮西町の赤松海岸遺跡で多量に出土しており、近接する長崎県では国見連山の西北に岩下洞穴遺跡が所在する。

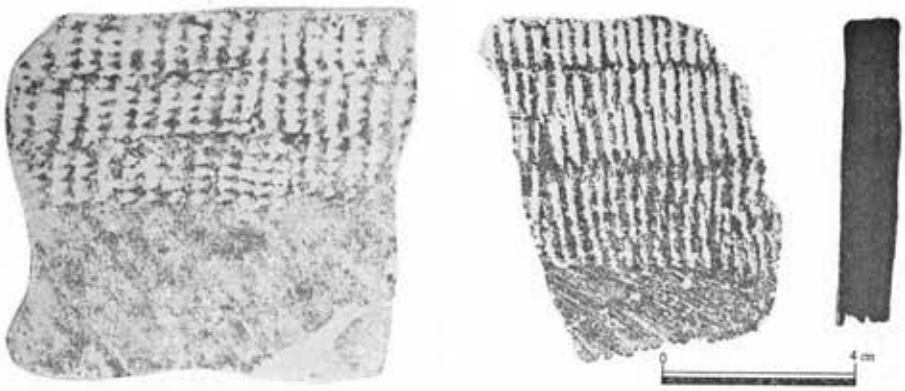
この遺跡の第三層の土器と共に平沢良・鈴桶両遺跡で出土している石核（不定形コアー）に類似する石核が少数であるが共伴しており、「考古学雑誌」第五十一巻三号において問題提起がなされており、今後注意をはらう必要があろう。

押型文土器は全国的に分布しているが、県西部における層位的出土は最初であり、楕円押型文土器と山形押型文土器が層位的上下関係を示しており、特に山形押型文においては川原田洞穴遺跡出土の土器に類似しており、押型文土器の中においても古い時期に位置するものと思われる。

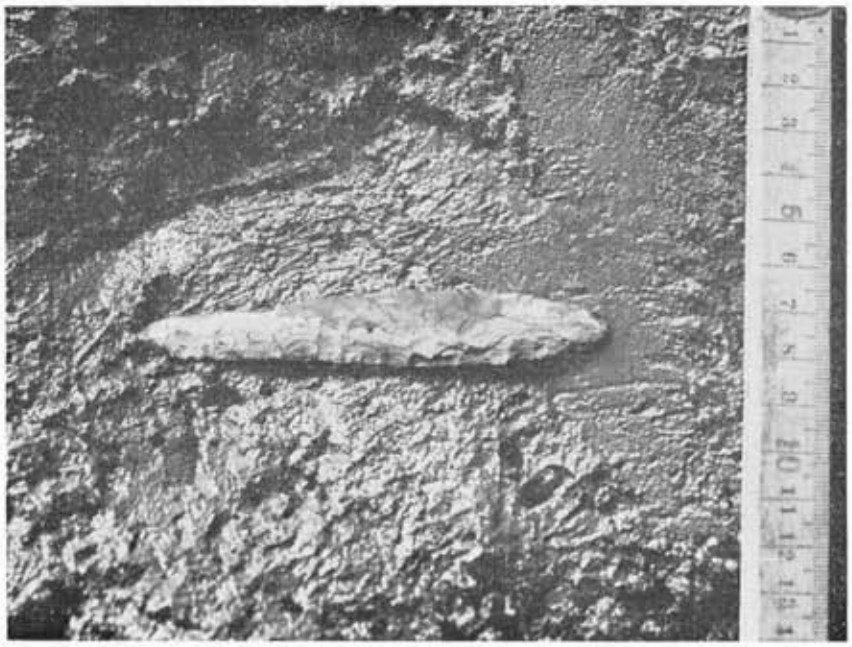
当遺跡出土の土器の中で注目されるのが、下層出土の櫛目文土器であろう。この櫛目文土器は文様構成は点と線からなる二種類の文様があるが、施文原体は同一のものであろう。層位的関係で押型文土器と分離でき、押型文土器より下層に出土する。

層位的に出土したこの櫛目文土器の分布は九州においていままで出土例が確認されておらず、この土器に極めて類似する文様をもつ土器としては、新潟県の小瀬ケ沢洞穴がある。小瀬ケ沢洞穴を調査された長岡市立科学博物館の中村孝三郎氏は、当遺跡下層出土の櫛目文土器を「よりユーラシア大陸の古代文化系土器の息吹きが強く感じられる」と、問題提起をなされていることに注目し、目を大陸・特に朝鮮半島に移してみる必要があるのではなかろうか。

朝鮮半島は盌人岩洞穴遺跡とは近接してり、曾畑系統の土器に類似する土器が朝鮮半島にもあるところから、この櫛目文土器においても朝鮮半島出土の櫛目文土器に比較検討するのも一手段として考える必要があろう。特に九州において出土例がない現時点においては必要と考える。



第16図　櫛目文土器拓影



第17図　石槍の出土状況

朝鮮半島出土の櫛目文土器を知るためには、有光教一氏の研究論文である「朝鮮櫛目文土器の研究」がある。この論文に掲載されている図版中に、ㅅㅓㅜㄹ（ソウル）近郊の岩寺里（Ganjiri）遺跡出土の尖底の櫛目文土器があり、文様が六段に区切つてある。ここで異なるのは盌人岩洞穴出土の文様は五段ということだけで、文様は類

似する。その他、釜山近郊の東三洞（Tosando）遺跡、平壌近郊の羅津（Rashin）遺跡等出土の櫛目文土器に類似点が見られることに注意をはらいたい。この櫛目文土器は朝鮮半島において、いまだ編年の確立がなされておらず、九州における出土例もないところから、まだ資料不足であり、即朝鮮半島との関連性をうんぬんするのは早計であり、とりあえず問題提起をし、今後の調査での共伴資料の追加が望まれる。

今回の発掘調査で出土した石器の数は二六〇点に達する。層位別には第三層六九、第四A層一一七、第四B層三七、そして第五層が三七である。この石器は層位による差異はもちろんであるが、共伴する土器とも特徴的な相関々係を示している。即ち

第三層出土の阿高系土器には剝片鏃が、第四A層の押型文土器には半磨製石鏃および小型石刃が共伴している。

第四B層の櫛目文土器には安山岩製の大型で、粗い調整の尖頭器が伴なっている。この石器は多久市三年山、茶園原先土器遺跡出土のそれと形状、技法が酷似していることが注目される。また、安山岩製で大型の掻器および削器も出土し、この洞穴遺物の中でも形状的、技法的に特異な存在である。

第五層の隆起線文土器には、サヌカイト製で、押圧剝離技法で両面を徹細に調整している石槍が共伴している。

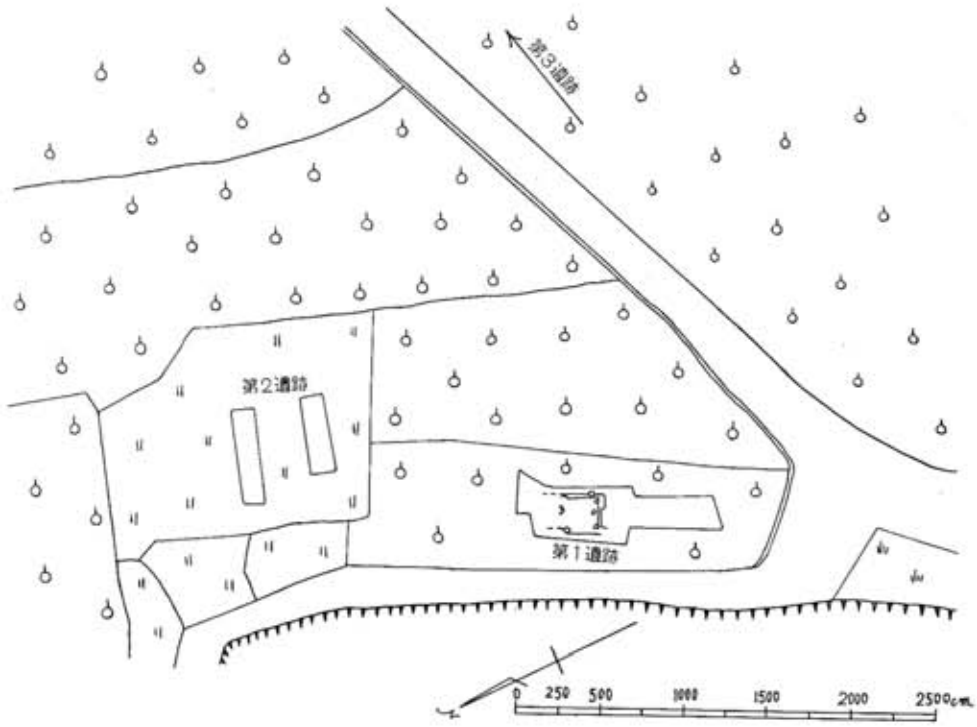
以上が、土器との相関によって考えられるが、各層からの土器の出土数が少ないので、この結論をもって、他遺跡の出土遺物を比定することはできない。

しかし、佐賀県における石器組成および編年についての重要な問題を提起したものと言えよう。

第三章　伊古石遺跡

伊古石遺跡の発掘状景

第18図　伊古石遺跡地形図



第一節　遺跡の概要

標高七七六・七メートルの国見山や七〇七・四メートルの八天岳を主峰として、南北に屏風のように連なつている山脈から有田川の形成する平地へ向つて舌状の小丘陵が多く派生している。この伊古石遺跡もその舌状小丘陵上にあつて、標高一三〇メートル余りの比較的高燥なところに位置している。

この遺跡の西側には、大正年間の初めごろに築成された貯水池があり、南北の両側は小峡谷となつていて、約四〇〇メートルの幅員をもつて貯水池のところから東へゆるやかに傾斜している。この遺跡のある丘陵は、早くから畑地として利用されており、最近密柑の植栽も始められていて、遺構の破壊は相当に進んでいることが考えられる。地表に黒曜石の石鏃やフレイクが相当広範囲にわたつて散布しているが、その遺跡の範囲は明らかでなく、一〇〇メートル四方に及んでいるのではないかと推定される。

この伊古石遺跡の東方約五〇〇メートルのところにぬすど岩洞穴がある。この伊古石遺跡では、三か所にトレンチを設定して調査を実施したが、この三か所を第一。第二。第三遺跡と呼ぶことにした。第一遺跡は、小道をはさんで貯水池の東側に、第二遺跡は第一遺跡の北方約一〇メートルの至近の地点、第三遺跡は第一遺跡の東方約五〇メートルのところに位置している。第一遺跡からは住居址、第二遺跡からは堆石遺構が発見されたが、第三遺跡では遺構を明らかにすることができなかつた。

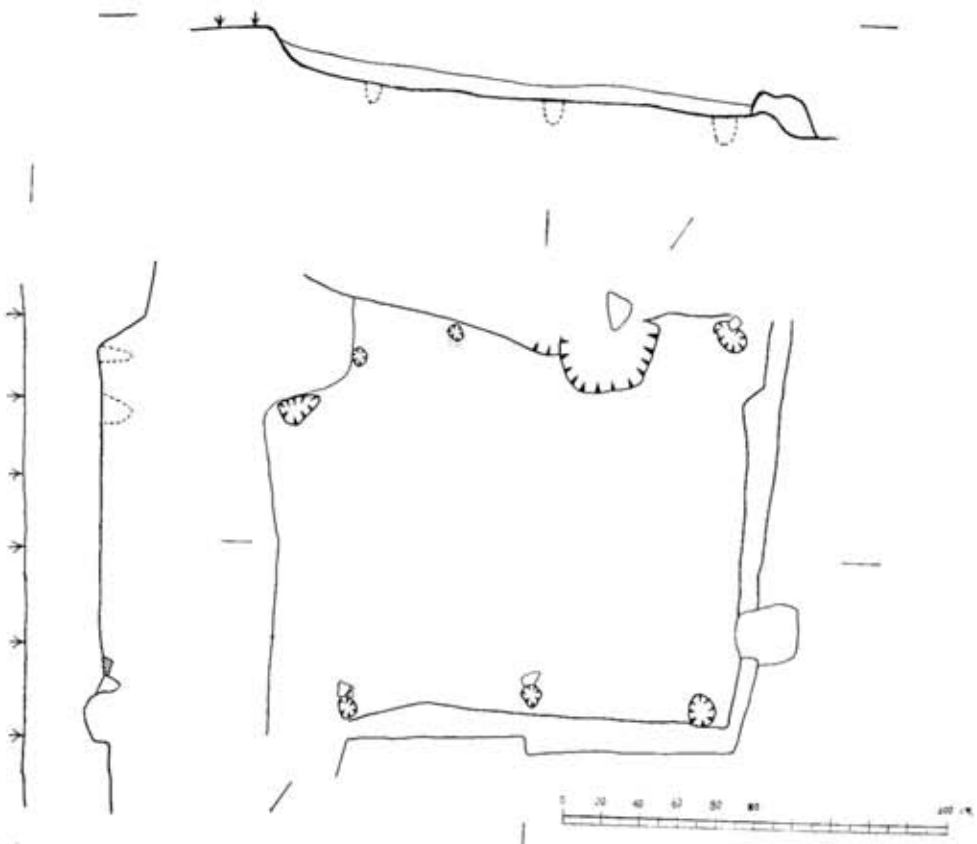
第二節　住居址と堆石遺構

住居址は、第一遺跡から発見されたものであるが、単独住居か集落を形成しているのか、発掘面積が狭かつたために明らかにすることができなかつた。長さ約一二メートル、幅二メートルのトレンチを設定して発掘したが、住居址の発見に伴ないその部分の幅を三・五メートルに拡げて調査を行なつた。

現地表下一〇～一五センチメートルまでが耕作土層であつて、その下層は黄褐色粘土質の同一層が相当深くまで続いているため、遺構の発見には困難が伴なつた。住居址は、その半分余りが破壊されて、その全貌を知ることはできないが、残存部分から推定して、二・四メートル×二・八メートル余りの方形プランの竪穴住居であることが推定される。壁面の高さは一〇～二三センチメートル余りで低く、柱穴は径一〇～二〇センチ、深さ一〇センチ前後で小さくて浅く、根じめの小石がおかれているところもある。

この柱穴は、長軸線のみでなく、各辺にそれぞれ三個づつ計九個の存在が推定されるところから、この住居の屋根が切妻であつたとすれば、その両端に棟持ち柱がそれぞれ設けられていたことが考えられる。

長軸線のほぼ中央で、やや片側に偏して炉が設けられている。炉穴は、径五〇センチメートル余りの不整円形で、深さは



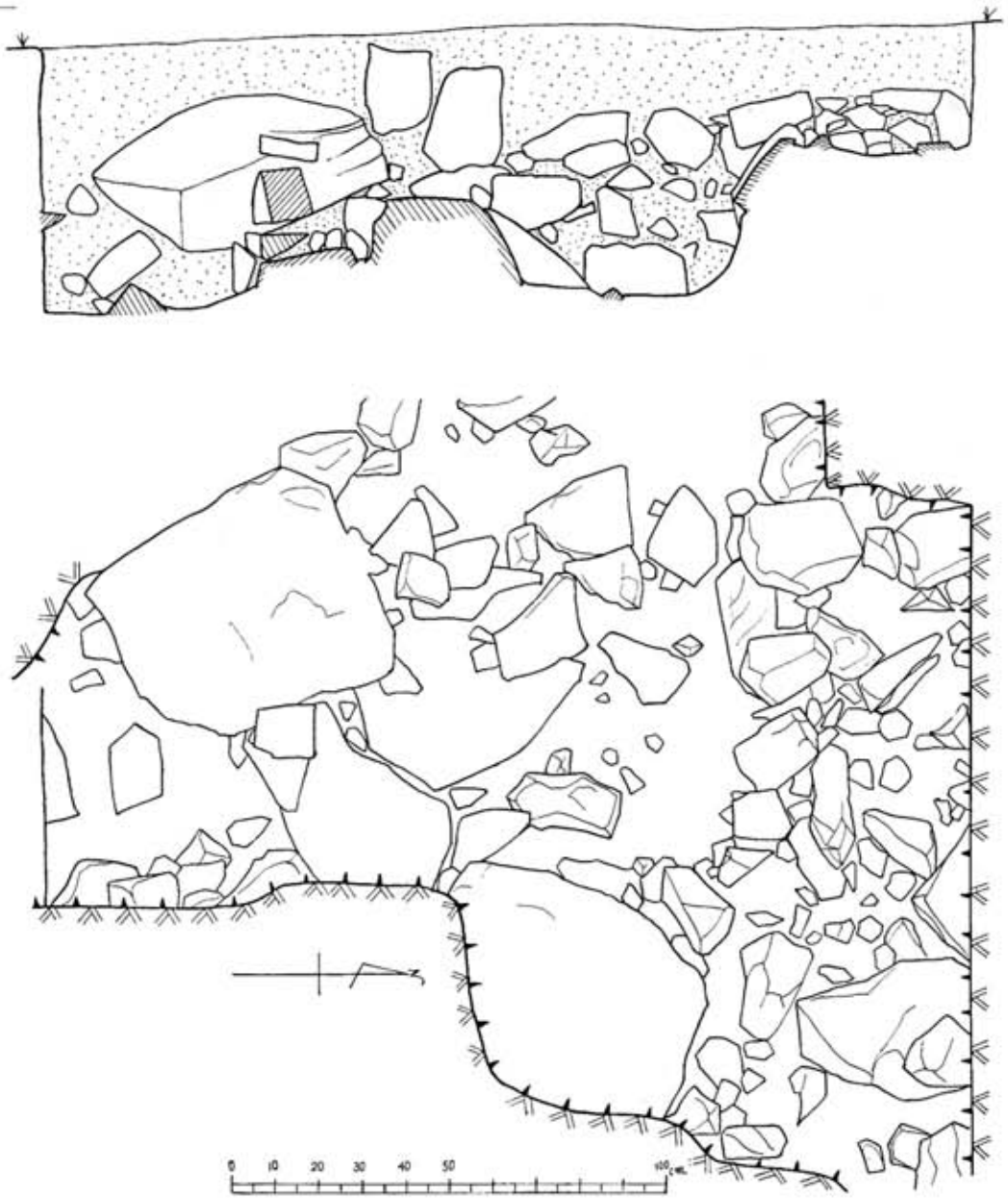
第19図　住居址実測図

二〇センチメートル前後である。

この第一遺跡からは、石鏃・ポイント・ブレイド・ナイフブレイド・スクレイパー・コア等の他多数のフレイクが出土したが、土器は一片も発見されなかつた。また、住居址の炉穴には木炭や木灰などの堆積が極めて少なく、発見された石器類もほとんどが住居址の周辺からであつて、住居址内には遺物が皆無にひとしい状態であつたことが注目される。

第二遺跡には、二・五メートルの間隔をおいて、幅一・五メートルの二本のトレンチを東西の方向に設定した。第一トレンチの長さは五・四メートル、第二トレンチは六・二メートルである。

約二〇センチメートルの厚さにひろがる耕作土を除去すると、その下に無雑作に堆積されたような自然石の層がひろがつていた。石の大きさは、径二〇～三〇センチメートル余りのもの



第20図　堆石遺構実測図（第１トレンチ東端の部分）

第21図　堆石遺構（第一トレンチ東端の部分）

が最大の部類で、それより小さいものが大部分をしめている。この堆石遺構の範囲は、明らかでないが相当広範囲に及んでいるのではないかということが考えられる。

この遺跡には、相当巨大な自然石が数個地表に露出しているが、この堆石遺構と関係があるのではないかということも注目される点である。この遺跡のある畑の隅には、小石がうず高く積まれているが、これは耕作中に出土した石を除去したものであつて、この堆石遺構が相当に改変されていることを物語つているようである。

自然石を雑然と堆積したような遺構ではあるが、比較的に大きい石を円形に配したような構造の部分が一部に存在している。特に第一トレンチの東端には、暗褐色土が充満している二穴があつて注目された。この穴は、径六〇センチメートル、深さ四〇センチメートル前後の不整円穴であるが、当初の深さは明らかでない。穴内にも多くの石が落込んでいたが、これは耕作による第二次的なものであることが推定される。この落ち込み石が、側壁であつたのか、あるいは天井を覆つていたものであるのかは明らかでない。

この堆石遺構は、径六〇センチメートル前後の石囲い群であることが推定されるのであるが、耕作による破壊の度がひどく、原状を復原することが困難な現状である。

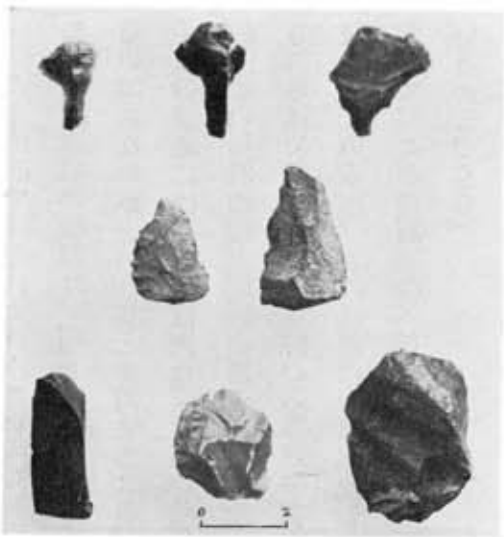
この堆石遺構の性格は明らかでないが、この堆石の上部や堆石の間から多数のフレイクとともに、石鏃・ポイント・ブレイド・ドリル・コアなどの石器とともに土器片が三個出土した。

第三節　遺　物

一　石　器

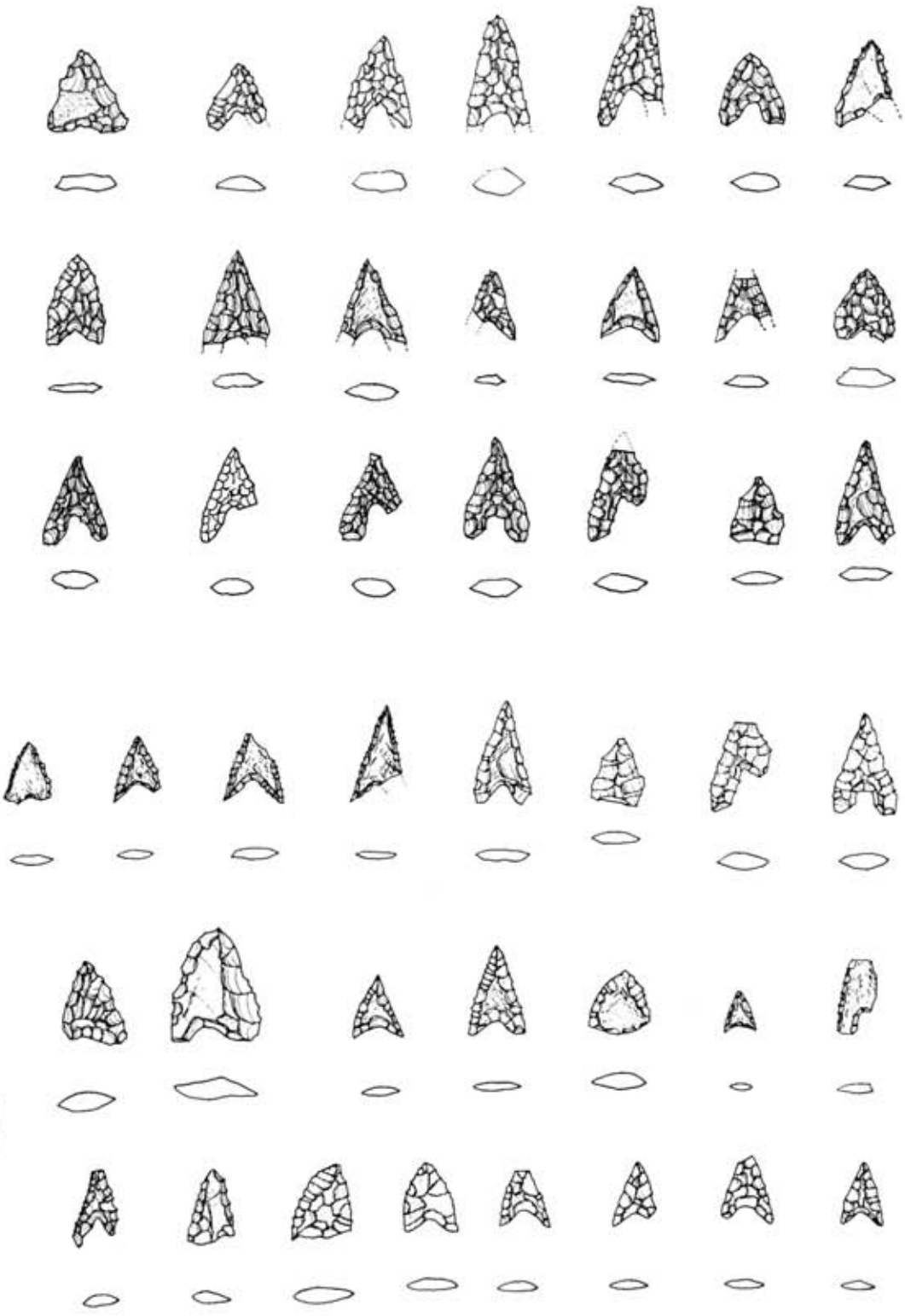
第一・第二・第三の各遺跡から石器は相当数発見された。その大部分は黒曜石であるが、僅かばかりサヌカイドのものも含まれている。

第22図　伊古石遺跡出土の石器

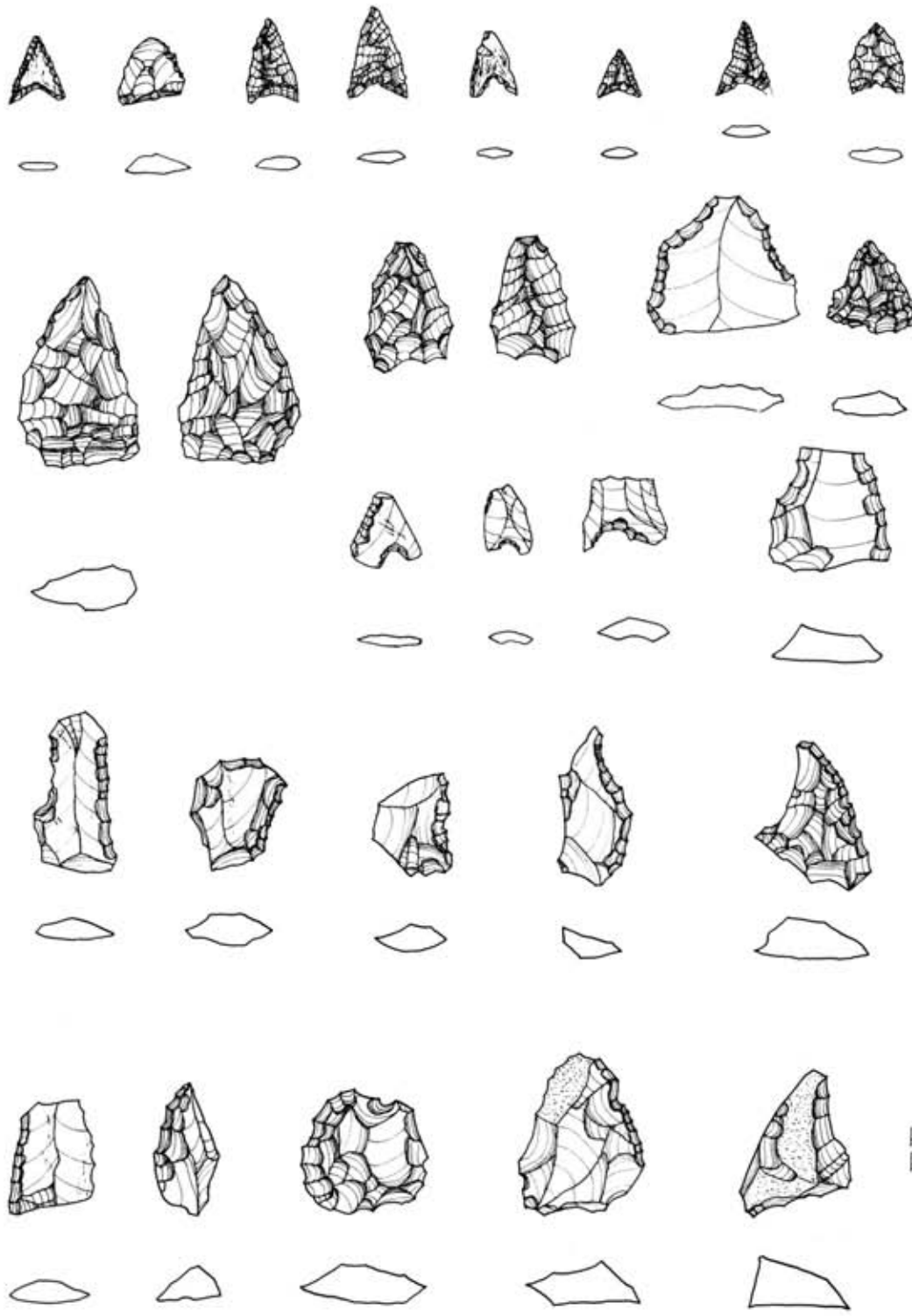


第23図　伊古石第２遺跡出土の石器

石器には、石鏃。ブレイド。ナイフブレイド。スクレイパー。ドリル等があつて、他に若干のコアと多数のフレイクが発見さ



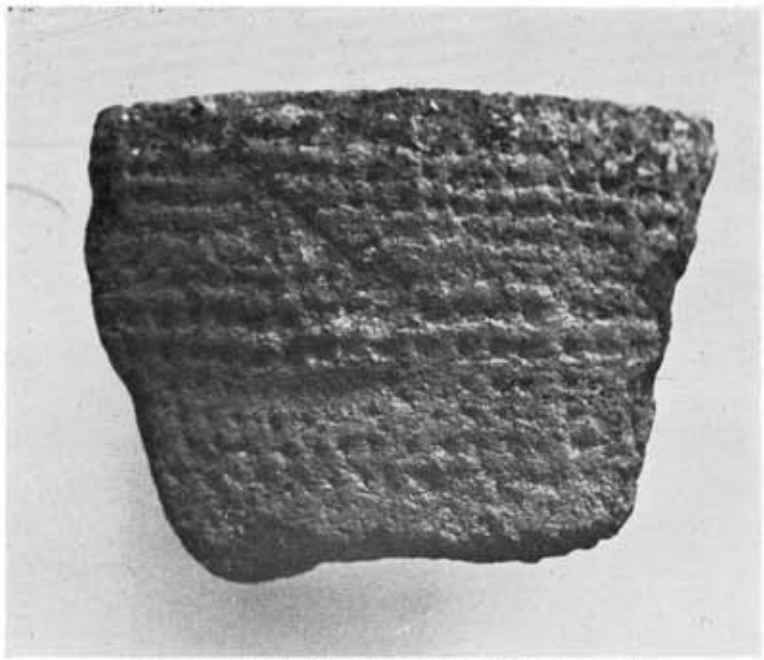
第24図　伊古石遺跡出土の石鏃実測図



第25図　伊古石遺跡出土の石器実測図

れている。

石鏃には、打製石鏃。剝片鏃と刃部を残して両面を平滑に磨いた半磨製石鏃の三種類がある。底辺の切り込みの深いものから正三角形状を呈する小形のものまで、比較的に変化に富んでいるが、三遺跡間に石鏃の形式の上で差異はないようである。ブレイドは、稜が一本通つて断面が三角形を呈するものと、二本通つて断面が梯形をなすものとがあり、刃部に二次加工のピツチが施されているものと、ないものとの二種類がある。ドリル形の石器四点は、すべて第二遺跡の堆石遺構中から出土したもので、黒曜石が用いられている。一種の剝片石器であつて、二点には片面に一本の稜が通つている。先端はすべて欠失していて、その全貌は明らかでない。



第26図　伊古石第２遺跡出土の押型文土器

二　土　器

伊古石遺跡からの土器の出土は極めて少なく、第一遺跡の住居址からは全然発見されず、第二遺跡の堆石遺構中から三片と、遺構不明の第三遺跡から二片が発見されたにすぎなかつた。

第三遺跡出土の二片は、小片であつて文様も明らかでないが、第二遺跡出土の一片は比較的に大きい破片で押型文を有している。この押型文土器は、厚手で暗褐色を呈し、焼成は余り堅緻ではない。この破片は口縁部であつて、器面全体に比較的に大きな格子目の押型が施されている。他の二片は、小片であつて、文様

も余り明らかでないが、一片はやはり押型文らしく、やや薄手である。

第四節　総　括

伊古石遺跡は、東に向かつてゆるやかに傾斜する舌状丘陵地にあつて、地勢は比較的に高燥であり、西には屏風を立てたように山脈が連なつている。南と北の両側には小谿谷が形成されていて、飲料水にもこと欠くことのない位置をしめている。

相当広範囲に及ぶこの遺跡が同一時期のものであるのかどうか、密柑の植栽も相当に進んでいて、調査を実施することは不可能に近い現状である。石器類の散布が多く見られる点から集落が形成されていた可能性も考えられるのであるが、今回の調査では竪穴住居址が一戸発見されたにすぎなかつた。

この竪穴住居址からは土器が発見されなかつたが、この遺跡から一〇メートル余り離れた第二遺跡からは押型文土器が出土しており、両遺跡が極めて近接している点と石器類に類似点が見られることからこの住居址もやはり押型文の時期のものではなかろうかと推定される。盗人岩洞穴においては、半磨製石鏃が第四層の上層から出土し、押型文土器を伴なつており、剝片鏃が第三層から出土して中期の土器を伴なつている。この伊古石遺跡では、半磨製鏃と剝片鏃の両方が出土しているので、縄文早期の押型文の時期から縄文中期に及ぶ遺跡である可能性もまた考えられるようである。ただ、この住居址の炉穴に炭灰が極めて少なく、また、住居址の内部から土器はいうまでもなく、石器類もほとんど発見されなかつた点が注目される。

第二遺跡の堆石遺構がどんな性格の遺跡であるのか、明らかにすることはできなかつたが、円形の石囲い二か所を確認することができたことは、一つの収穫であつたと考えられる。比較的に近接して築成されていた円形の石囲いが、耕作によつ

て破壊された遺構であろうと推定され、堆石間から発見された石器や土器によつて、この遺構が押型文土器に伴なうものであることは、ほぼあやまりがないであろうと考えられる。

径六〇センチメートル余りの石囲いが、何の用に供されたものであるのか、この種の遺構が他に知られていない現状においては明らかでなく、また、この遺構からもそれを推定するにたる遺物は発見されなかつた。

しいて類推すれば、埋葬に伴なう施設と考えるより他にはないように思われる。すなはち、径六〇センチメートル余りの石囲いの墓壙が群集している遺跡ではないかと考えられるのであるが、群集墓とすれば当然近くに相当な住居址の存在を想定しなければならないのではなかろうか。

（付　記）

昭和四十四年三月、伊古石第三遺跡の密柑園造成作業中に、山形押型文土器片一〇個余りが発見されたが、遺構は明らかでなかつたといわれる。とにかく、この伊古石遺跡は、押型文土器に伴なう時期の遺跡であることはほぼあやまりがないように思われる。

第四章　坂の下遺跡

坂の下遺跡全景（手前より２枚目の田んぼ）

第一節　遺跡の概要

この遺跡は有田川の支流、浄源寺川の上流約二キロメートル、国見山麓が平地に漸移する標高約八十メートルの舌状台地の先端部やや東寄りに階段状に開かれた水田に位置する。地形は西方から東北方へと傾斜し、台地に対して鋏状をなして浄源寺川がさかのぼつている。

遺跡の東北には黒曜石の原石を豊富に埋蔵する腰岳があり、前方、有田川ぞいの段丘上には多くの遺跡が点在する。後背地には押型文土器を伴出する伊古石遺跡や隆起線文土器から阿高土器までを包蔵する盗人岩遺跡がある。

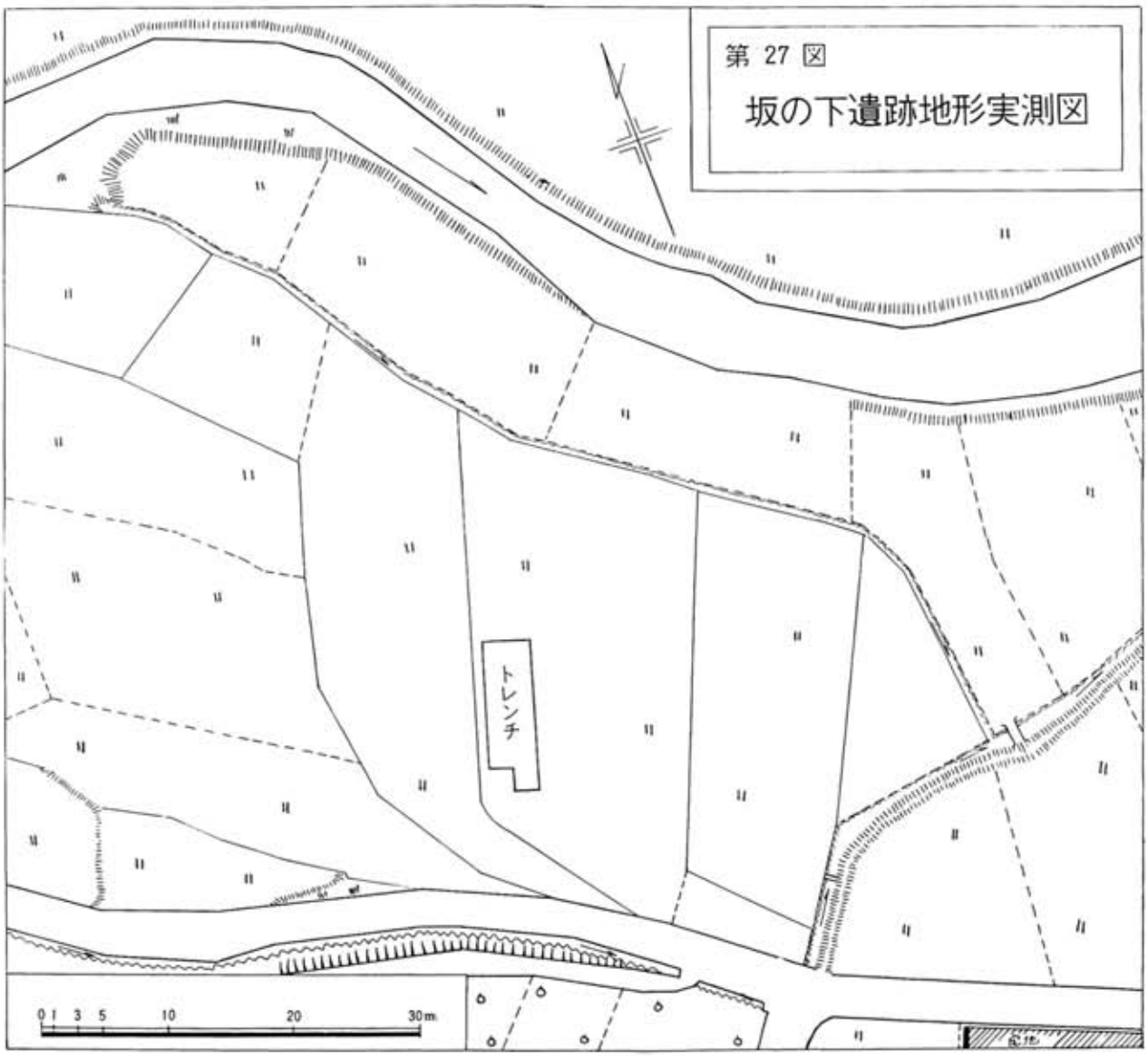
坂の下遺跡は、昭和四十一年三月、水田の石垣造成工事中に多数の石器や土器片が発見されて始めて注目された遺跡である。

発掘は昭和四十一年六月の予備調査で柱の残痕などが確認されていたので、縄文時代中期の住居址を想定して、予備調査地点のすぐ横に4×10メートルのトレンチを設定した。

厚さ十五～十八センチメートルの耕作土を除去すると石器およびフレイク、多量の土器片、木材そして不規則な大小無数の石を包含する褐色土層となる。その下、暗灰色土の薄層があり、青色粘土層となる。この青色粘土層には径・深さ不定の不整円形ピットが七箇所切り込まれ、ピット内部には広葉樹の枝や葉にて上下を遮断されて多量の木の実が貯蔵されていた。ピットの構造は各々異なり、使用目的も同一とは思われない。

この遺跡から出土した遺物は概ね①土器②石器③木製品④植物質製品⑤植物質自然物に大別される。

発掘の当初は縄文中期の住居址を想定していたが、ピットの発見によつて、貯蔵穴址であることが確認された。なお、褐色土層に包含される遺物については、細石や細砂が混入しているところが随所にみられ、大小無数の石、木材も人為的ものと認め難いので、洪水等自然災害による堆積の可能性が強い。


第 27 図
坂の下遺跡地形実測図
トレンチ
0 1 3 5 10 20 30m

第二節　貯蔵穴址

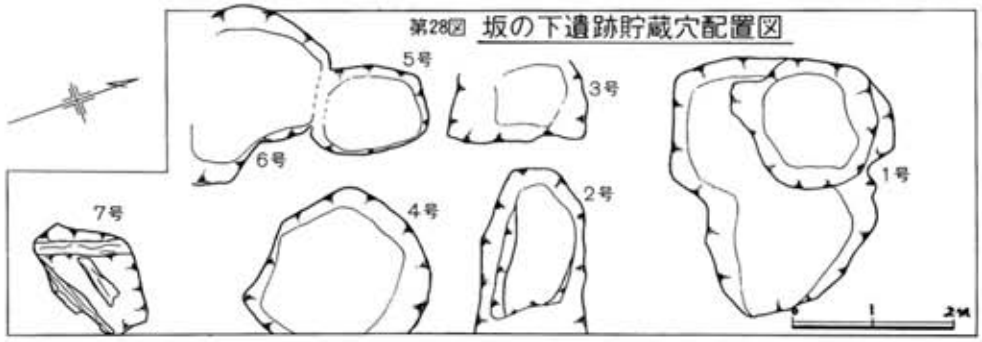
厚さ十五～十八センチメートルの耕作土を除去すると、大小無数の石が不規則に散在し、多量の阿高式系土器片および石器・フレイクを包含する褐色土層となる。

この不規則な石が何を意味するのか不明なので、厚さ十～十三センチメートルの褐色土のみを除去していくと、暗灰色の土層が一部に認められた。また木材も発見されるので、住居址を想定して不規則な石を除去していくと、その下に青色粘土（通称アヲギチ）層があることが確認された。この青色粘土層にそつて発掘を進めていくと前記の暗灰色粘土層は青色粘土層に切り込まれた直径一・二メートル位の不整円形プランをなすピツトであることが確認された。木炭・灰・土器片（阿高式系）包含の暗灰色土を除去すると広葉の圧積した約五センチメートルの層となり、その下から多量のアラカシ・ツブラ椎等の木の実が堆積した状態で出土したので、このピツトは縄文時代中期に、木の実を貯蔵することを目的として構築された事が明確となつた。

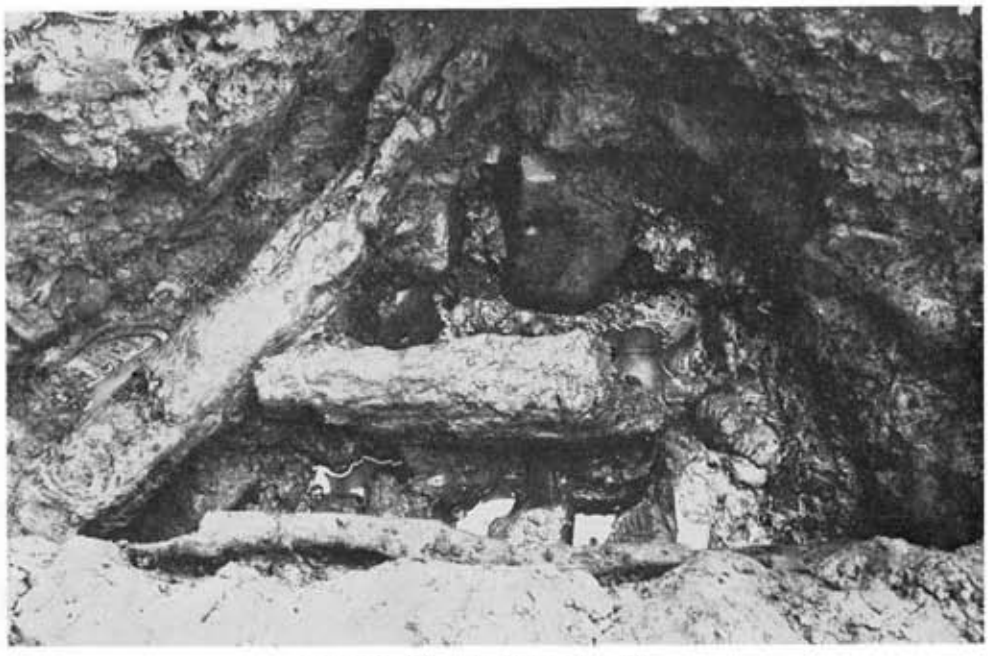
確認した貯蔵穴は七箇所であつたが、湧水と地形的条件および発掘期日の関係から、第一号と第五号の他は完全に調査を終えることができなかつたが、以下その構造と性格を示したい。

第一号穴が最も大きくて、穴は径三・一メートル×二・八メートルと径一・八メートル×一・六メートルの二段構築の不整円形で、壁面および底は青色粘土で固められている。

第二号穴は短径一・二メートルの不整円形、第三号穴は径一・六メートル×一・四メートル余りと推定され壁面の勾配はゆるやかである。第四号穴は、径二・二メートル×二メートル余りと推定される不整円形、第五号穴の径は一・四メートル×一・一メートルで、やや方形に近い形態を呈している。第六号穴は二・二メートル×一・六メートル余りの径を有する不



第29図 貯 蔵 穴 全 景



第30図 第 7 号 貯 蔵 穴

整円形で、第七号穴の大きさは明らかでない。

深さも不規則で、一番浅いのは二号穴の表土面より九十センチメートル、深いのは一号穴の一二〇センチメートルである。

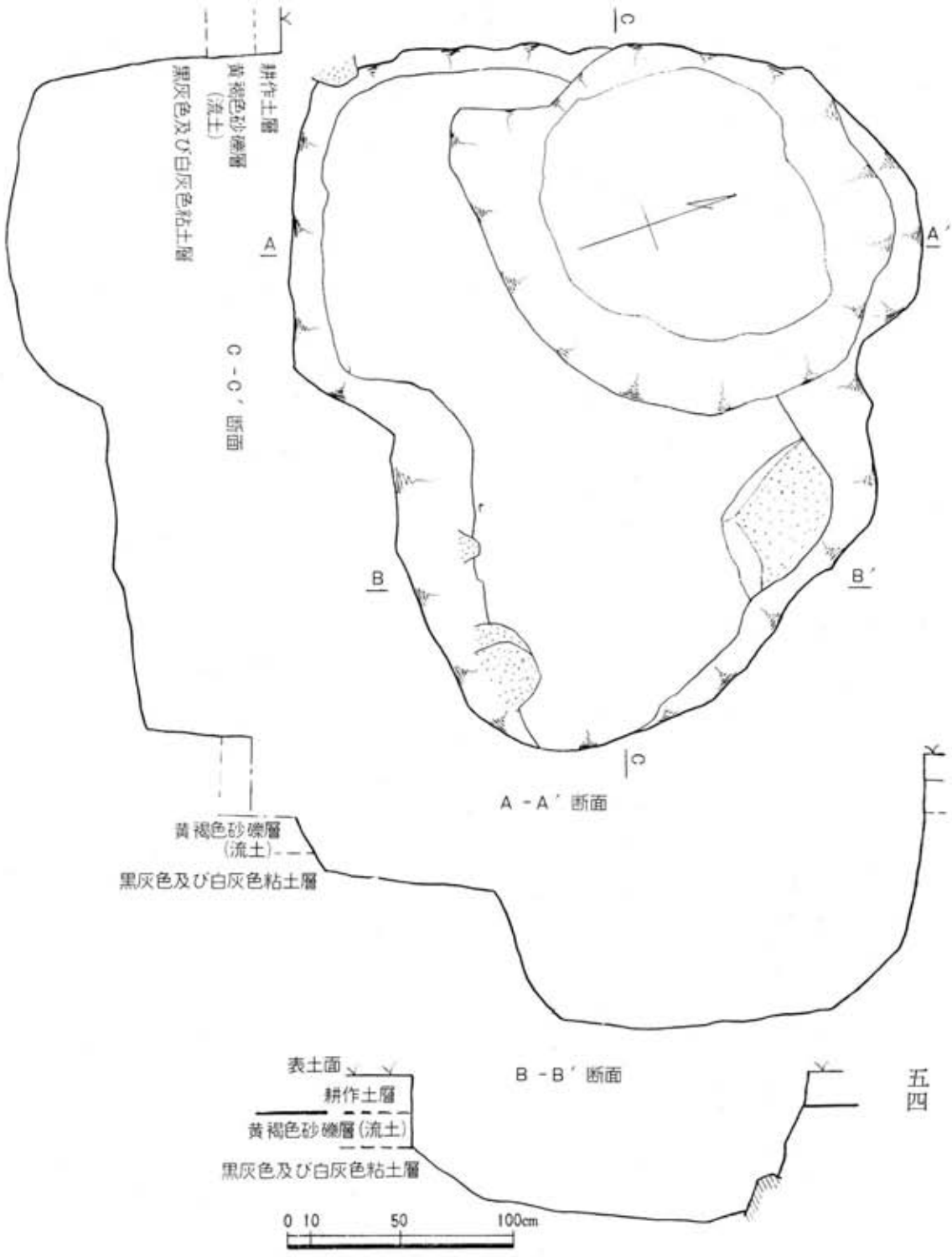
穴の内部構造は七号穴では木炭、灰、土器を包含する腐蝕質の軟弱な暗褐色土層があり、その下は約五センチの圧縮された広葉層となる。その下に木の実が堆積する。その下は木の葉が堆積し、最下層は細砂層と青色粘土の底となる。この関係はまず木の実をつめ、その上を木の葉で覆つたものであろう。尚、広葉層からは格子状の編み方をしたアンペラに似たものや籠状の容器を編んだと思われるヒモが発見された。これは上、下段の木の実を隔絶させる役目か、木の葉を押さえる役目を果したものかどうかは不明であるが、岡山県の山陽町南方前池遺跡におけるピットに縦横に差し渡された恰好の木組みやアンペラに比定されるべきものとも思われる。

第七号穴には壁面の一部に石積みと整然たる木組みが認められたが、完全な発掘が不可能であつたためにその全貌を明らかにすることは出来なかつた。

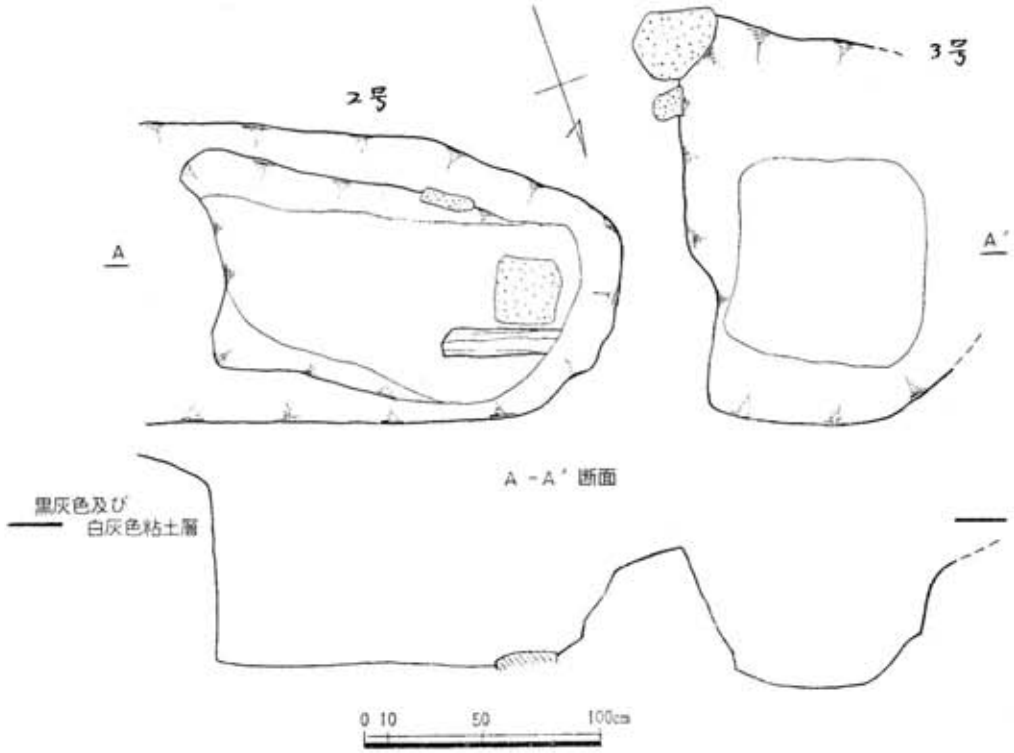
第四号と第六号は他穴と異なり、穴の一隅に支柱を立てて木を積み重ねて壁面をつくり、その内部には直径四～五センチメートルの木材や小枝や木の葉で充満されていたが、この囲いの内部には少量の木の実しか確認することは出来なかつた。

以上、四号と五号を除いては、各ピットともに構造上多少の相違はあつても原理的には全く同じであり木の実の貯蔵穴と考えて差支えないと思われる。

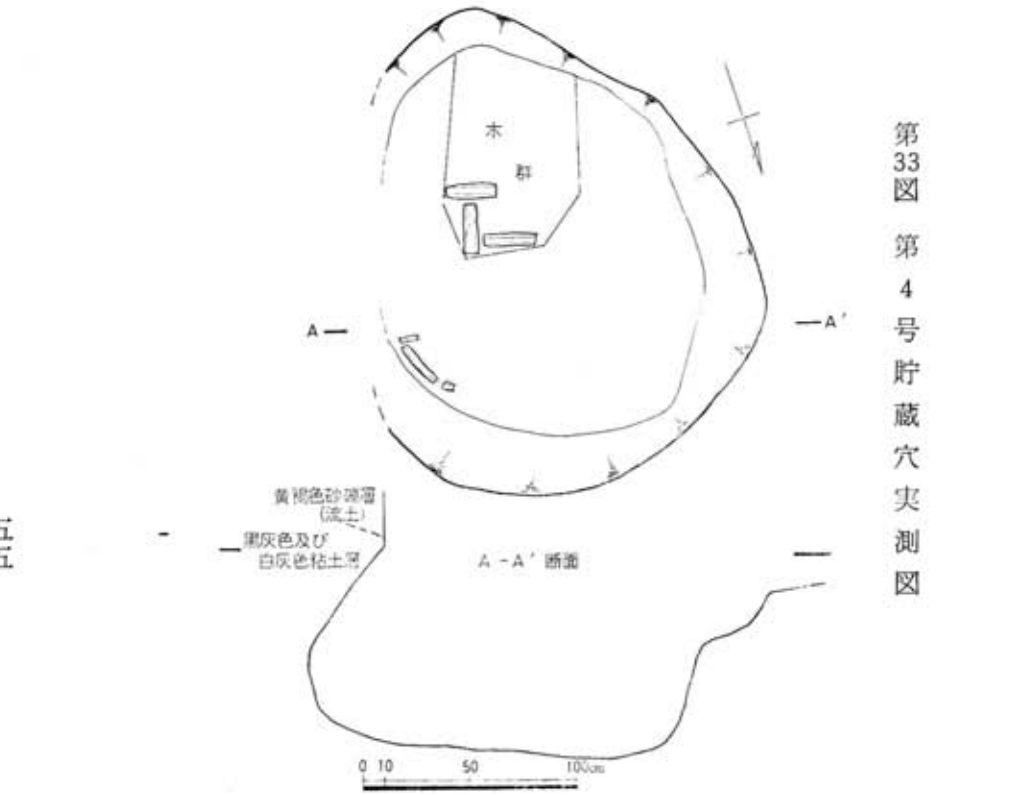
これらのピットから貯蔵方法を推定してみると、まづ、ピットの底に砂、ついで木の葉、木の枝（第六穴）をしくか、砂をしきつめ（第二穴）て木の実を入れ、中間に木の葉や枝やアンペラ状編物を入れる（第二穴）などして、ピットの中に木の実が一杯になると木の葉を相当多量にのせて覆蓋としていたと考えられる。尚、ピット内から出土する木材や石は木の葉を押圧する役目を果していたとも考えられるが、この点は明確にすることはできなかつた。



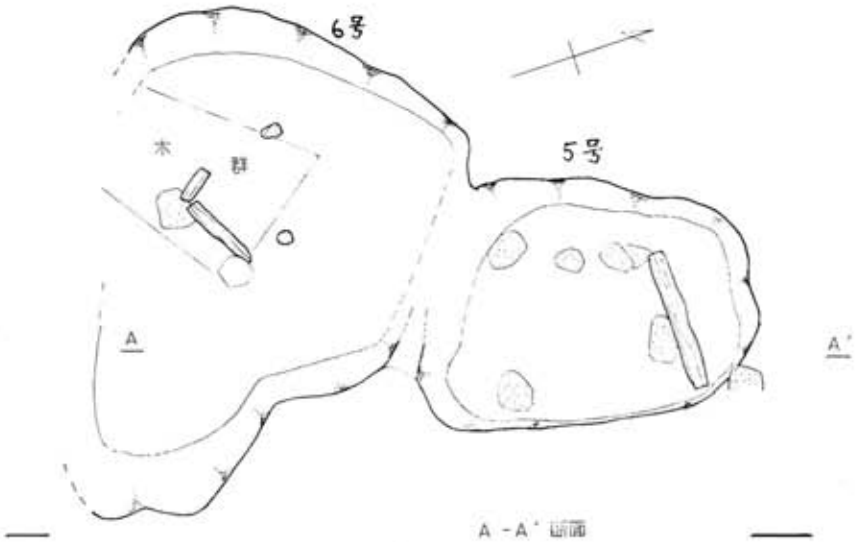
第31図　第１号貯蔵穴実測図



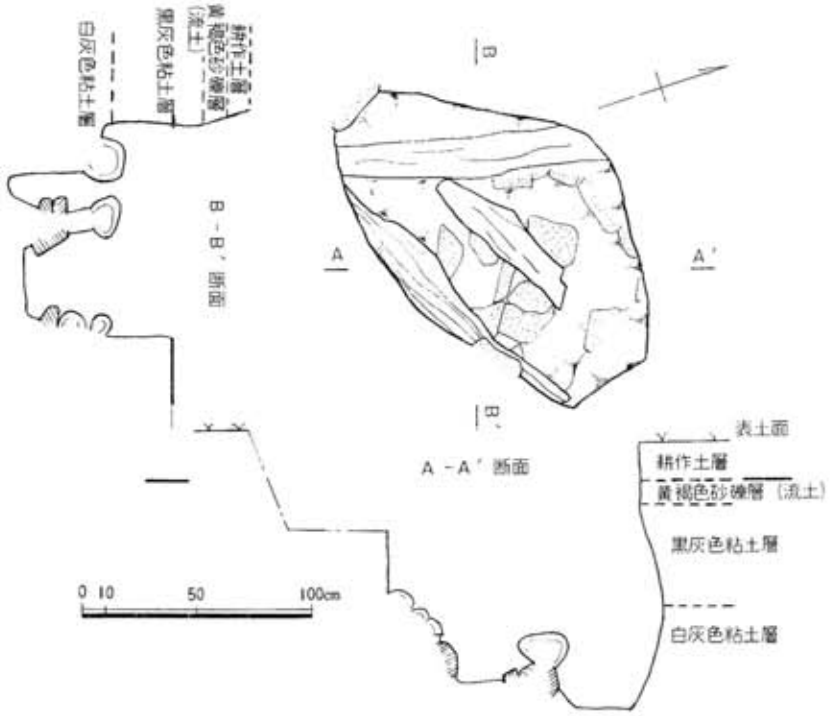
第32図　第2号・第3号貯蔵穴実測図



第33図　第4号貯蔵穴実測図



第34図　第5号・第6号貯蔵穴実測図



第35図　第7号貯蔵穴実測図

第36図　第　1　号　貯　蔵　穴

第37図　第　6　号　貯　蔵　穴

第三節　遺　物

一　石器および石製品

石器は主として赤褐色土層から出土し、土器に比しその量は少ない。次に坂の下遺跡から出土した石器を列記すれば次の通りである。

(一)　石　鏃

打製石鏃二十九個と剝片石鏃五個の計三十四個発見されている。

打製石鏃は形態上、次の八種類に分けられる。

1　両面に粗い加工があり、基部に全く抉り込みがない。（26）

2　やや長手で、両面に粗い加工があり、基部は片方からの剝離による僅かな抉り込みがある。（10、27）

3　両面に丹念なる加工があり、脚部は鋭く、弧を描くような抉り込みがある。（6、18）

4　やや細身で、粗い両面加工がなされ、基部にはやや開き気味のU字型抉り込みがある。（3、5、16）

5　細身で、両面に細かい加工があり、基部にはU字型の抉り込みがある。（2）

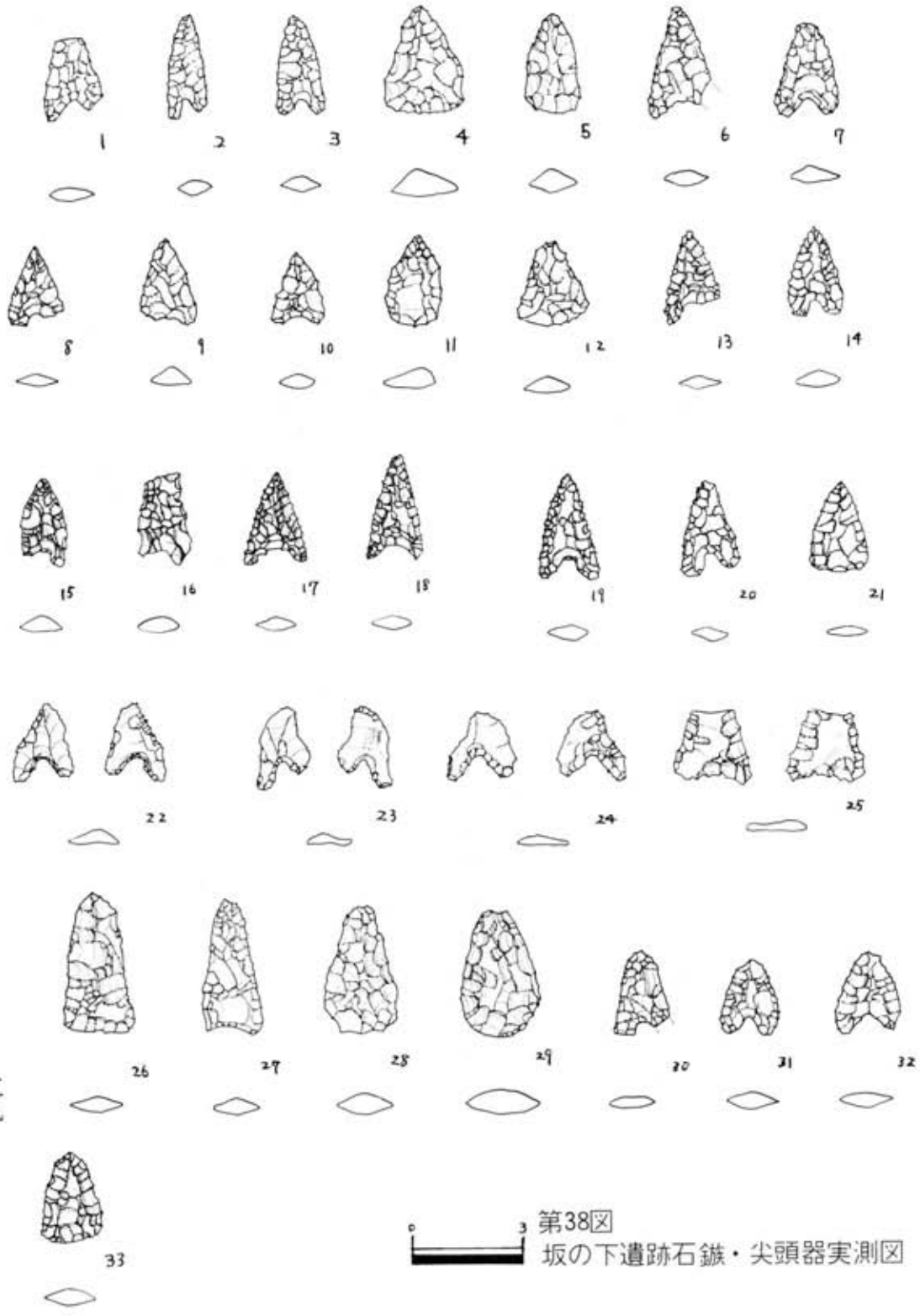
6　粗い両面加工で、基部にはやや開き気味の抉り込みがある。（7、9、14、17、20、30、31）

7　細かい両面加工で、二辺には鋸歯状の細かい突起があり、基部にはやや開き気味のU字型抉り込みがある。（19）

8　基部にV字型の抉り込みがある。（1、8、13、22）

剝片石鏃は次の二種類である。

1　剝離面は下部からの方向を示し、脚部および先端部に加工を加え、やや開き気味の抉り込みがある。脚は右が短か



第38図
坂の下遺跡石鏃・尖頭器実測図

く、全体として扁平で不整形である。（22、23、24）

2　左脚に打瘤があり、そこを細部加工することによつて隆起をやわらげて脚を形成する。やや彎曲ぎみに抉りとられた底部と側辺に粗雑な加工がある。（25）

(二)　尖頭状石器

尖頭状石器は九箇発見されたが次の三種に大別される。

1　三角形の剝片を使用し、主として辺を加工し、大部分は剝離面を残すもの。（11、21、33）

2　両面の剝離は三角形に整え、部厚いもの。（4、5、28、29）

3　両面の剝離は三角形に整え、先端部は尖り、扁平なもの。（12）

(三)　打製石槍

サヌカイト製で、先端部を欠くが、有舌尖頭器の基部をなすと思われる。表面中央には剝離面を、裏面中央には自然面を残して粗い加工がほどこされている。断面は菱形を呈する。（第39図7）

(四)　石　匙

縦型一箇、横型三箇の計四箇が発見された。第39図1は黒曜石製で、両面とも中央に向つて細かい剝離がほどこされ、主体部の断面は菱形に近い、横型の代表的なものである。4は黒曜石製の横型で、両面に粗雑な剝離がほどこされ、断面は扁平である。2はサヌカイト製の横型であり、両面からの加工で刃部を形成している。つまみの上端には自然面が残されている。

5はサヌカイト製の縦型で、つまみ部を欠失しているが、貝殻状裂痕から見て、打瘤とつまみの位置が同一である。両面からの加工で刃部を形成している。

(五)　石　斧

磨製石斧は三箇発見されたが、いずれも安山岩製で、敲打によつてやや扁平に整形した原材を両面から加工し、蛤状の刃としている。（第40図2）

(六) 掻　器

掻器はサヌカイト製二箇、黒曜石製一箇が発見されたが、いずれも不定形の角ばつた剝片の先端に両面から粗い加工をなし刃部を形成している。（第39図3、6、9）

(七) 削　器

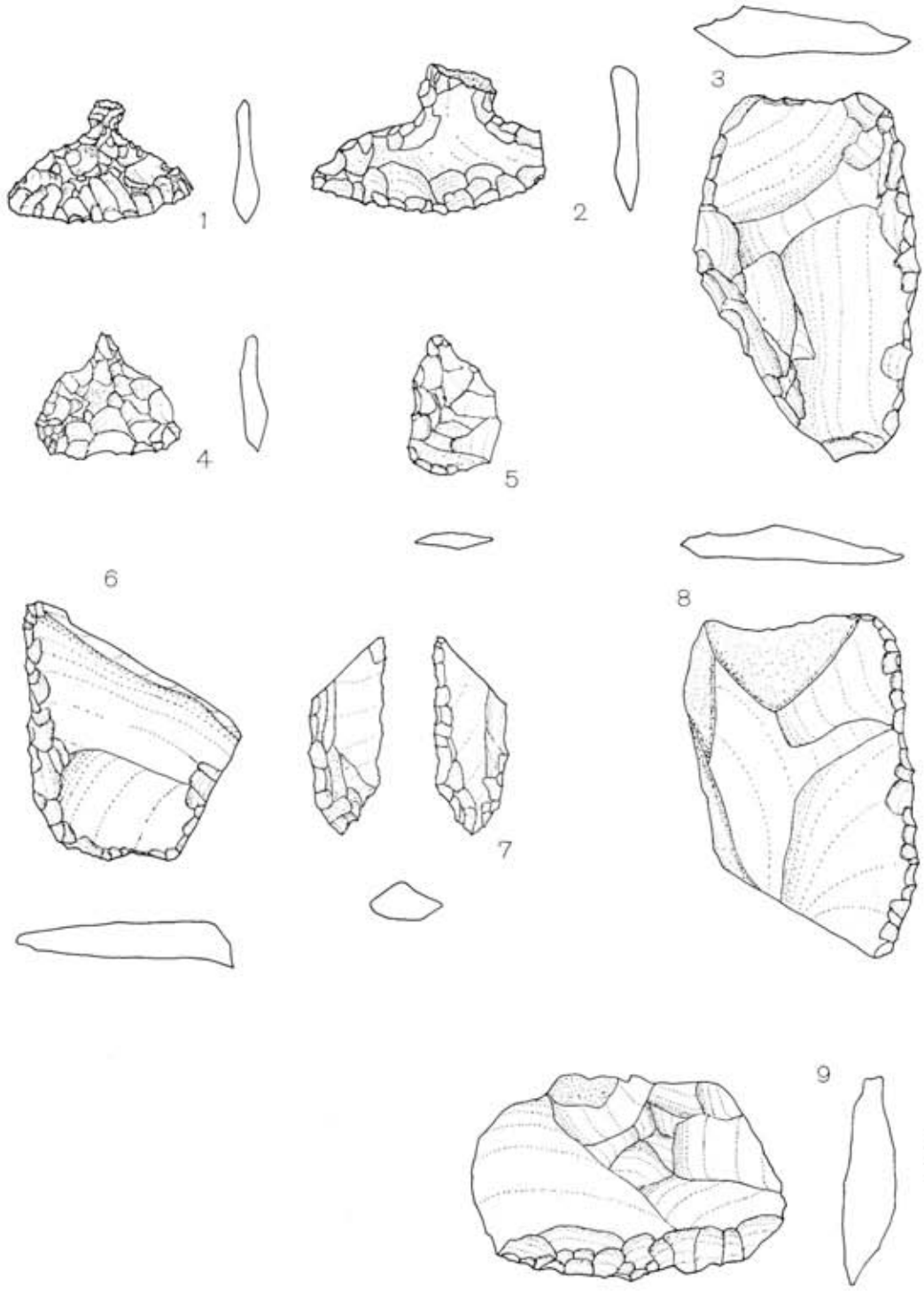
削器はサヌカイト製一箇（第39図8）が発見されたが、縦長の不定形剝片を使用している。右端表面を密に、裏面に僅かの加工で刃部を形成している。

(八) 有溝砥石

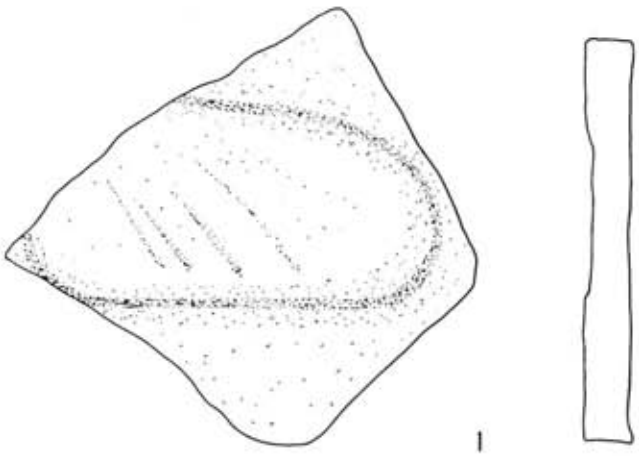
盤状の硬砂岩で、両面に研磨痕をとどめるが、全体の形状は不明である。表面には幅三ミリメートル～四ミリメートル、深さ約二ミリメートル、長さ約八〇ミリメートルの溝、裏面には幅約二五ミリメートル、深さ約一ミリメートル、長さ約四〇ミリメートルの溝がある。（第40図1）

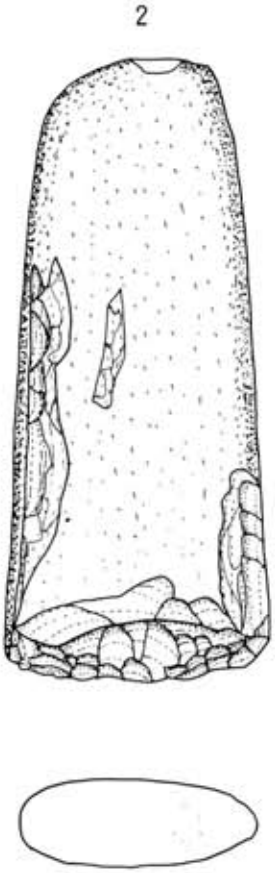
(九) 砥　石（第40図3、4）

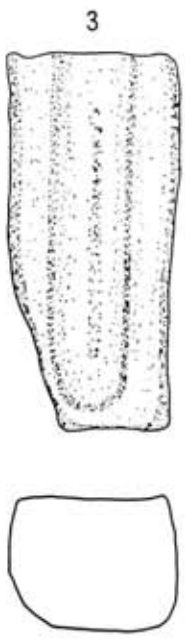
断面が四角のものと五角のもの一本ずつ発見されたが、両先端ともに欠損している。角はいずれも丸味を帯びているが、一角は特に著しく、弧状を呈する。そして、五角形にあつてはこの稜より数えて三稜と四稜でつくる面が滑らかに磨耗し、四稜の線は彎曲している。四角の場合は二稜と三稜の面が約八センチメートルの長さで指跡状に凹凸をなして滑らかに磨耗している。石を手で握つて使用したものと推定される硬砂岩である。いずれも先端を欠失し、その用途は明確ではないが一応砥石に分類しておきたい。



第39図　坂の下遺跡石器実測図







第40図　坂の下遺跡石器実測図

二　土器および土製品

(一)　土　器

当遺跡出土の土器は熊本県阿高貝塚出土の土器、いわゆる西北九州における縄文時代中期に編年され位置ずけられている、阿高式土器に類似する文様を有する土器である。

当遺跡出土の土器の文様は六種類に大別され、その中でも阿高系統と思われるものは五類からなつている。

「第一類土器」は口縁部のみに「ヘラ状」の施文具によつてひっかいて、二段ないしは三段に平行に施文されている土器であり、第一類土器と同様口縁部のみに、指あるいは棒状の施文具によつて文様を施してある土器を「第二類土器」とし、口縁部から底部まで深い沈線文によつて施文されている土器を「第三類土器」、口縁部のみに規則正しい幾何形の文様を有する土器を「第四類土器」、口縁部のみに一条ないし二条の平行沈線を施文している土器を「第五類土器」として文様分類をおこなつた。

これらの土器は西北九州縄文時代の前期から中期の土器の特徴である、胎土に多量の滑石粉末を混入したものと同一である。

つぎに縄文時代後期に位置ずけられる土器片が出土しているが、これらの中期以後の文様をもつ土器を「第六類土器」として一括した。これらの第六類土器の出土量は少量であり、中期の層よりも上層で出土しているところから、水害等によつて後背地区より流入したものと思われる。

。　第一類土器（図42）

この土器は口縁部のみに「ヘラ状」の施文具によって、二段ないしは三段に、口縁部より胴部に向ってひっかくか上下にずらすようにして施文されてあり、文様は比較的浅い。

器形は後者の第二類と同様にたいへん大形の深鉢で、中には口縁の直径が約四〇センチメートルに達するものもあり、口縁部に対して底部が小さく、たいへん不安定な土器である。

さらにこの文様を有する土器の全面に「スス」が付着しており、この「スス」の状況から煮沸用として使用したものと思われる。

また胎土には多量の滑石粉末を混入してあるがこれは製作時の速乾性、焼成後の強度を増すための技法と思われ、焼成も高温度で、器面全体はなだらかで手ざわりがよく、土器製作時の技術がひじように高度であつたことがうかがわれる。

。第二類土器（図43）

第二類土器は器形・胎土・焼成とも第一類土器と同類であるが、文様の施文方法において若干の差異が認められる。

第一類土器が「ヘラ状」の施文具でひっかくか、上下にずらすようにして施文されているのに対して、第二類土器は指、あるいは先端が丸味をもつた棒状の施文具で突くようにして施文してあり、文様はほぼ円形をなしている。さらに文様は第一類と同様二段ないし三段に、口縁部のみに施文してあり、第一類が線・楕円に対して第二類は点であるという相異のみで、第一類土器と同時に製作・使用された土器であろう。

。第三類土器（図43）

前記二例とは相異点が多くみられるが、胎土に多量の滑石粉末を混入することにおいては同様である。

器形は第一類土器・第二類土器より少々、小形にはなるが、形態はほぼ同じである。

文様は口縁部の出土がないので不明であるが、胴部から底部まで、幅四ミリメートルから五ミリメートルの「ヘラ状」の施文具で、縦に平行に、浅く文様を施してあり、中には「ヘラ状」の施文具の跡がきれいに残つている土器片

もある。

前記二例が口縁部のみに施文されているのに対して、第三類土器は底部まで全面に施文しているところに大きな相異点がある。

。第四類土器（図44）

前記三例が胎土に多量の滑石粉末を混入しているのに対して、第四類土器は滑石粉末の混入度が極度に少なくなり、胎土も少々脆く、器面の艶が減少し、器形も口縁部でキャリパー状にくびれ、小形化するところに大きな相異がある。

文様は口縁部のみに施文されてあり、前記四例に比較すれば文様が豊富であり、規則正しい幾何学的な文様を施してある。

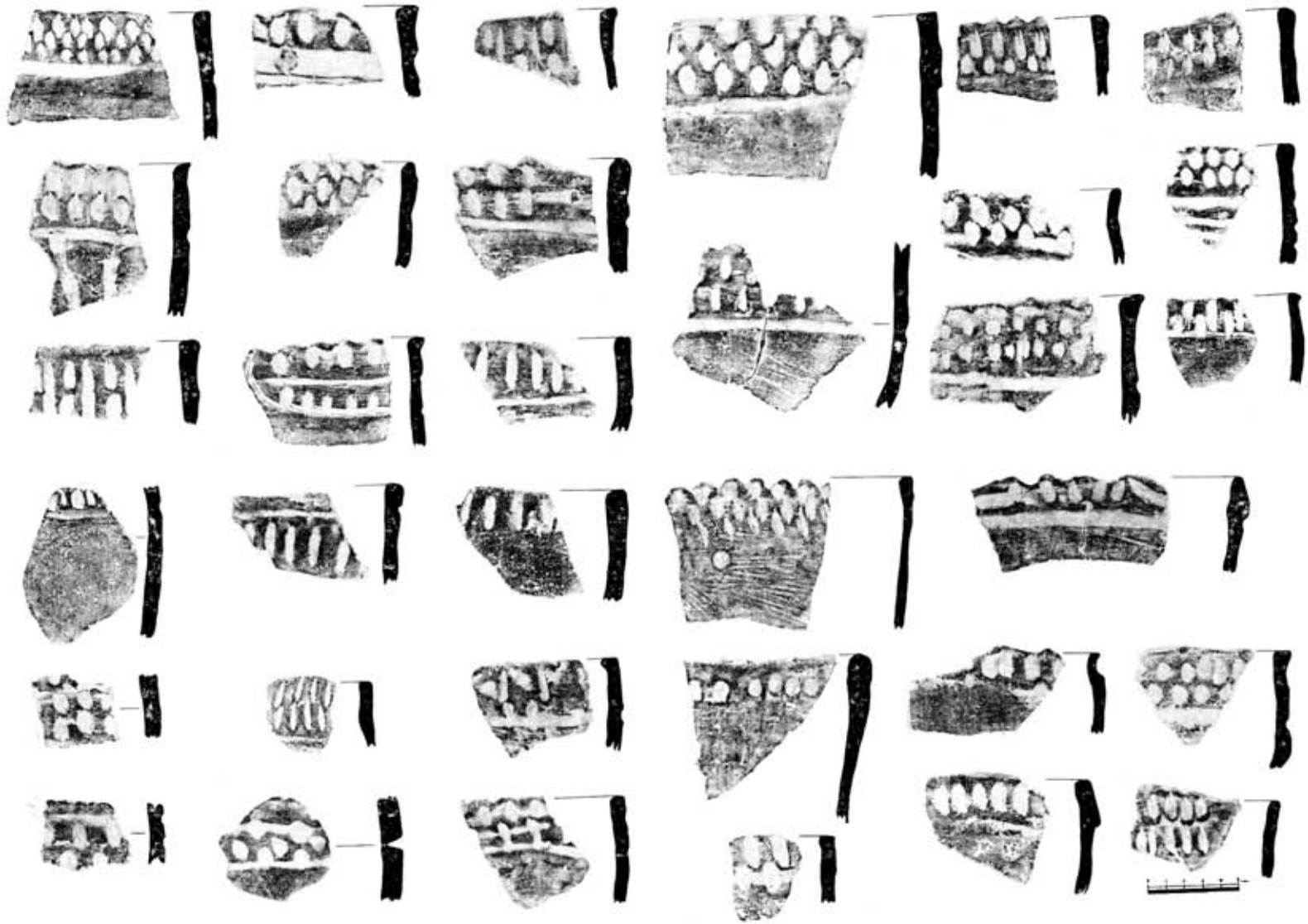
文様・器形・胎土等に大きな相異点がうかがわれるが、他の四例と共伴する土器である。

。第五類土器（図45）

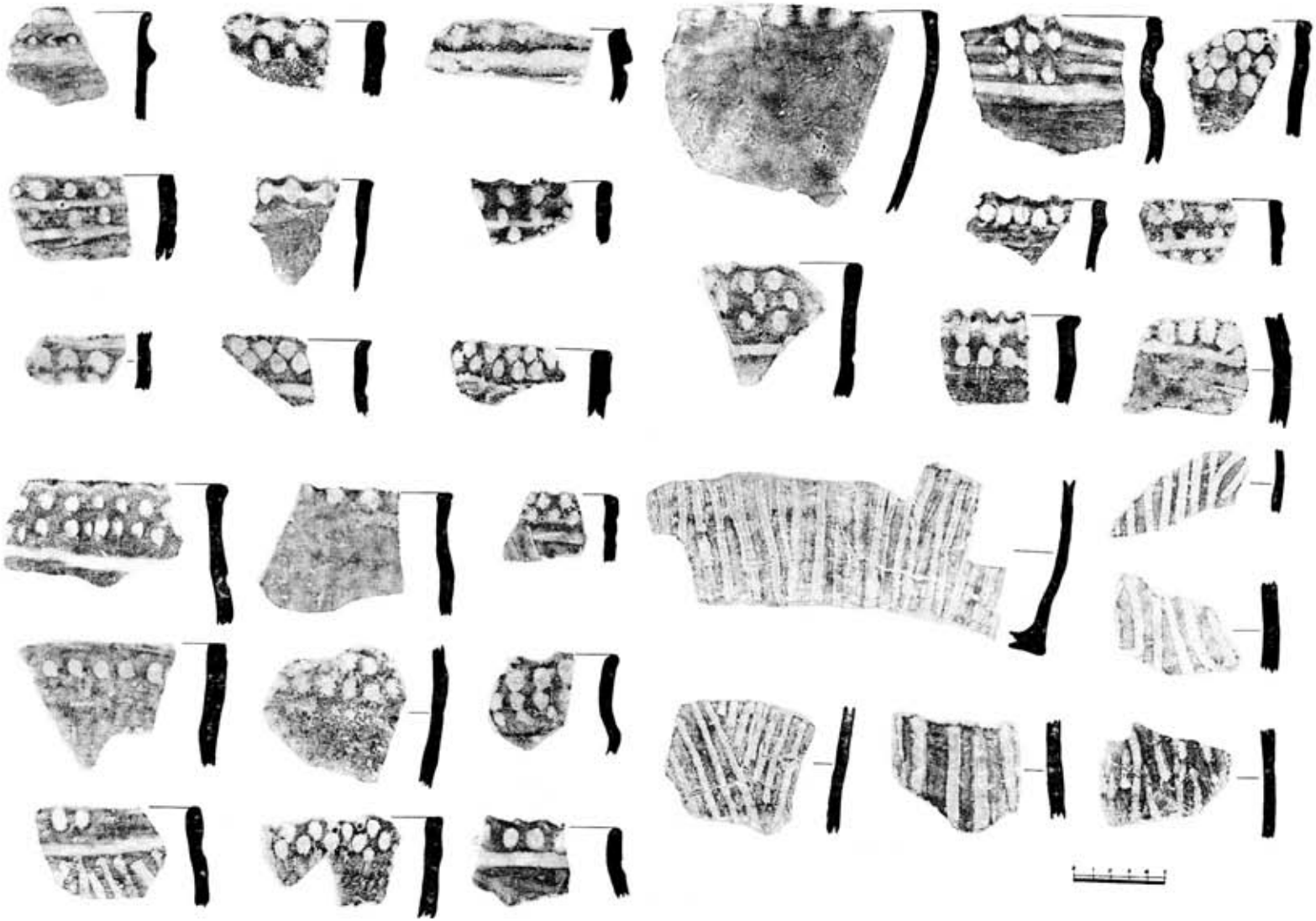
第五類土器は胎土に多量の滑石粉末を混入し、第一類土器・第二類土器と器形はほぼ同類であり、胴部は少々ふくらみをもつ大形の深鉢である。前記二例が一部に波状口唇を有するのに対し、第五類土器はすべて平唇をなしている。

第41図　土器出土状況

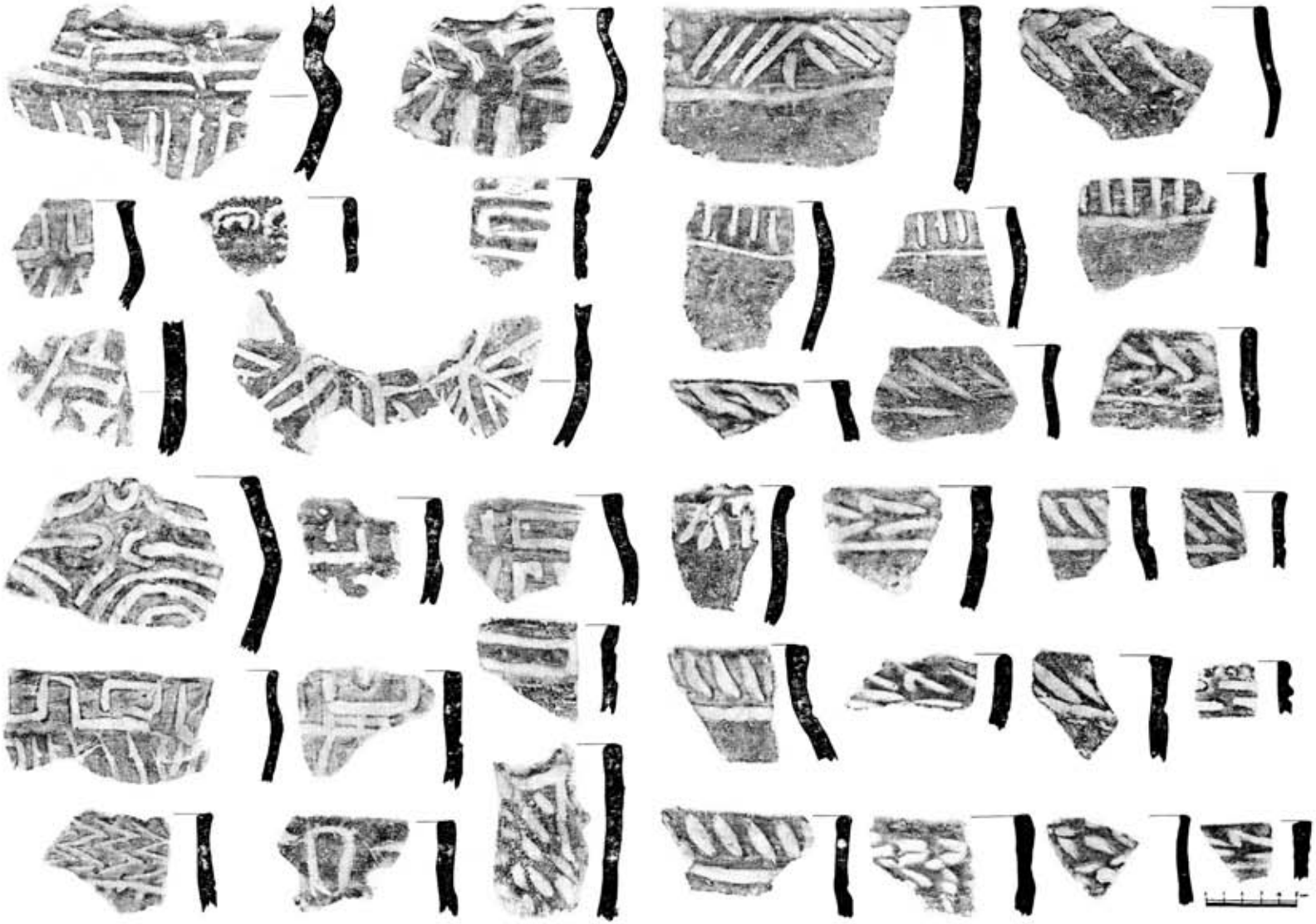
第42図　坂の下遺跡第一類土器（拓影）



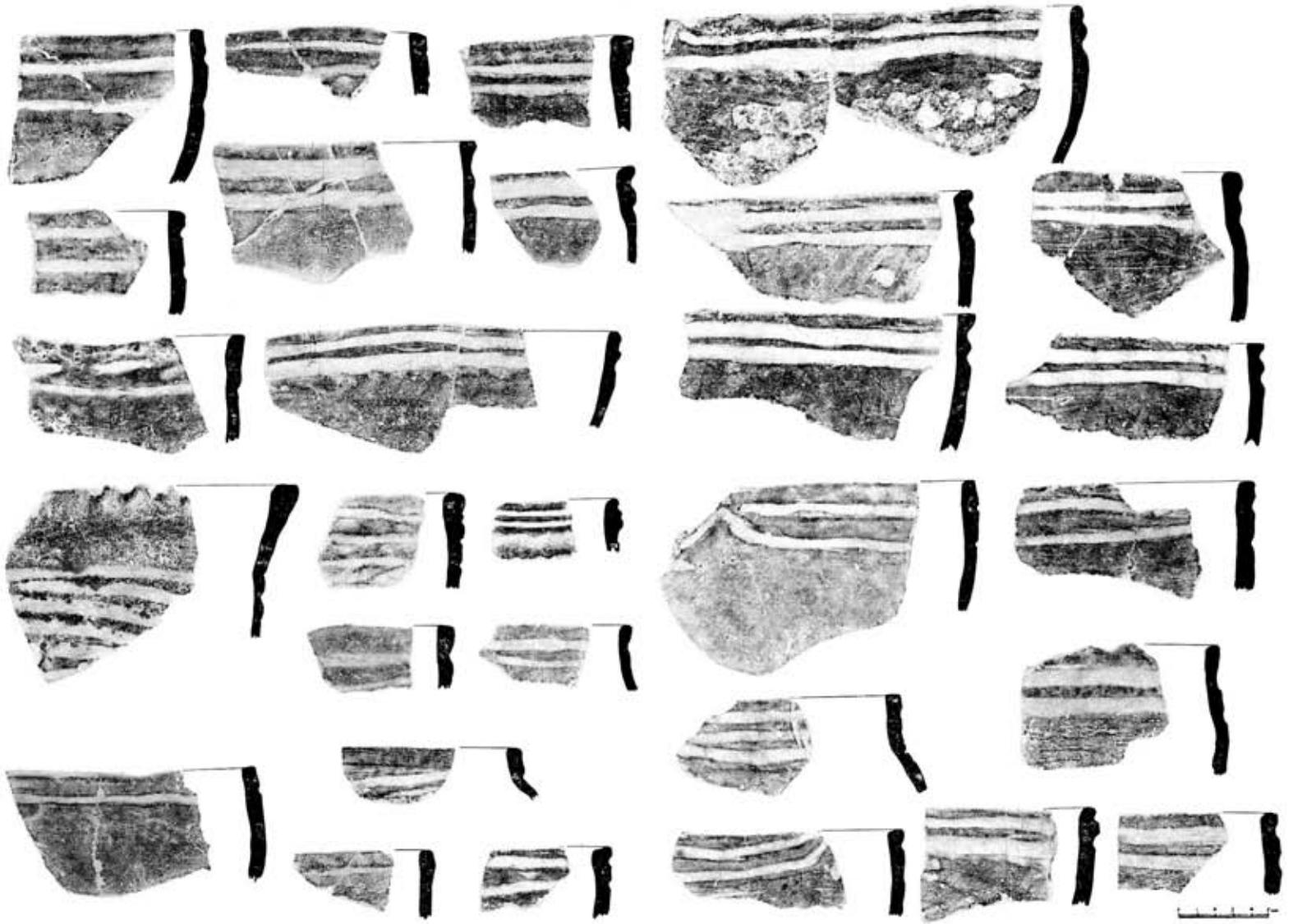
第43図　第 2 類・第 3類土器拓影

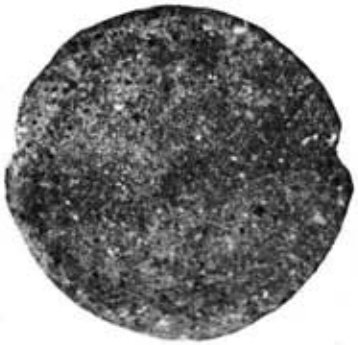


第44図　第　4　類　土　器　拓　影



第45図　第　5　類　土　器　拓　影





第46図　土錘（実大）

文様は口縁部のみに二条ないし三条の平行な沈線文のみのひじょうに単純な文様で、前記四例と共伴している。

。第六類土器

第六類土器は前記五型式の土器とは文様も異なり、胎土には滑石粉末をぜんぜん含まず、異質の土器であり、層位も前記五型式より上層に出土しており、細片である。またこの土器片の中には周囲が磨耗しているものがあり、おそらく水害等によつて流入したものと思われる。

文様を有するものの中には磨消し縄文の付いた土器片が一部出土しているが、小破片のため時期決定は不可能である。よつてこれらすべてを一括して第六類土器として取りあつかつた。

(二)　土製品

①　土錘

野や山で動物や木の実を採集して食料とする、自然採集経済生活の中で、川や海に魚を求めて食料としたことは当然であろう。

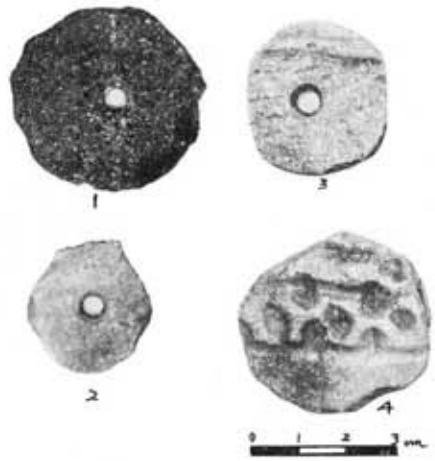
魚を求める漁撈道具として、釣針やモリの存在することが、縄文時代においても知られている。しかし、これらの道具は一度に大量の魚を捕獲することは困難なので、人間生活の知恵として、一度に大量の魚を取ろうと考えるのはもっともなことであり、大量に魚を取る方法として網の使用を考えたのも、必然的なことであつたにちがいない。

そこで網（漁網）を使用した関連遺物として、土錘・石錘によつて漁網を沈め、魚の逃げ道を防ぐ道具である。

現在のところ縄文時代における土錘・石錘の発見例は全国各地にあるが、漁網の発見はなされておらず、土錘・石

錘によつて漁撈生活の状況を推定している。

この漁撈生活を推測される一資料としての土錘が、当遺跡でも出土しており、漁網と断定することは困難であるが、漁網としても使用されうる網らしき破片が多数出土している。確認した土錘は一点のみで、網との関性があるかどうか不明であるが、縄文時代中期において当遺跡においても、漁撈生活がなされていたと推定される。



第47図　紡錘車

当遺跡発見の土錘は土器の底部を利用してあり、厚さ約五ミリメートルのひじように薄い底部で、直径が五センチメートルでほぼ正円形をなしており、縁辺を丹念に磨いて整形してあり、糸を結びつける部分は上下を簡単にえぐりこんでいるのみである。

坂の下遺跡でわずか一点の出土であつたが、おそらく広大な遺跡の一部と思われ、今後の発掘調査において、資料の追加がおこなわれる可能性は充分にある。

②　紡錘車

この遺跡から土器片利用の紡錘車が四箇出土した。

縄文時代中期以後の土器の底部には、布の文様がついていることが知られており、弥生式時代においてはこの現象が著しく、このようなことから、縄文時代の中期頃より織物の存在していたことが考えられ、すでに弥生時代の遺跡からは織物の実物さえ発見されている。

繊維を織る道具として、紡錘車があることも知られている。

当遺跡において、この紡錘車と共に三ツ組みの「ひも」が発見されており、さらにこのひもを一部利用した編物が存在するところから、当遺跡にも織物の技術があつたことは確実である。

当遺跡において出土している紡錘車はすべて縄文時代中期の阿高系の土器に伴なつており、四個の内、三個が土器の胴部の破片を利用し、他の一個は口縁部の文様のある部分を利用している。その他補修孔のある土器片が多数出土し、この土器片の周囲を整形すれば簡単に紡錘車にできるものも多くみられる。

(1)～(3)までの紡錘車は無文土器を利用しており、直径四・五センチメートルから六センチメートル、厚さは薄い紡錘車が約五ミリメートル、厚いのが約一センチメートルであり、孔は直径約八ミリメートル前後あり、(3)は縁辺を研磨して整形してある。

(4)の紡錘車のみに文様があり、中期独特の深い文様をもつており、胎土には多量の滑石を含み、孔は半透過である。当遺跡出土の土器のほとんどが口縁部のみに文様を施文しているところから、この紡錘車は口縁部片を利用して製作したものと思われ、縁辺を研磨して整形している。これら四個の紡錘車はすべてに多くの滑石を混入しており、縄文時代中期の土器の特徴を具備している。

第48図　顔面把手 $\left(\frac{1}{2}\right)$

③　顔面把手

当遺跡出土の唯一の異形把手であり、土器口縁部の把手に使用したものと思われ、西北九州縄文中期時代の土器の特徴である滑石粉末を多量に含んでいる。土器破損後、破損部を一部磨耗して整形してあり、信仰・装身具等の目的でいずれかの第二次的な用途に使用したものではなかろうか。一応顔面把手として分類した。

形態は左右ほぼ対称に製作してあり、二か所に穴を開け、鼻と思われる点をを高く隆起させ、隆起部分の二か所を指突してあり、鼻の形態をリアルに表現し、鼻の下は空洞で口をヘラ状の道具によつて描いたあとが残つている。

この顔面把手は縄文時代中期の土器と共伴し、中期独特の滑石粉末を多量に含んでいるところから、縄文時代中期阿高系統の土器の口縁部と思われ、土器の文様表現と共に、当時の美的感覚の一面がうかがわれる。

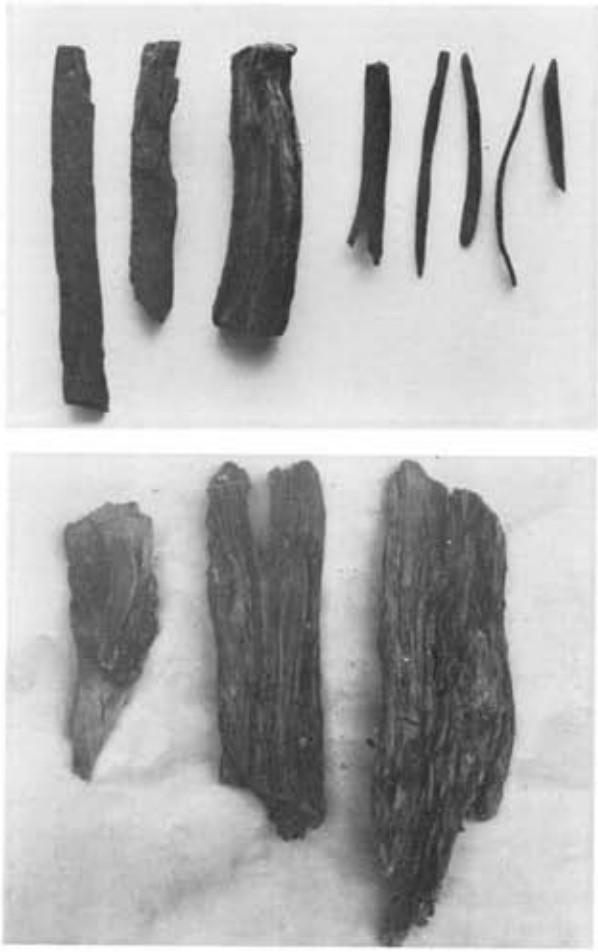
三　木　材

黄褐色土層および暗灰色土層にかなりの量の木材が包含されていた。材質はその殆んどが広葉樹である。形状的には次の四つに大別される。

㈠　自然の状態
㈡　縦裂きの状態
㈢　棒　杭
㈣　構　築　材

㈠については、黄褐色土層に主として認められ、細砂や細石の混入状態から考えて、洪水等の自然災害による流木の堆積と思われる。

㈡は黄褐色土層・暗灰色土層ともに包含され、木材を縦裂きにし表面が不整な

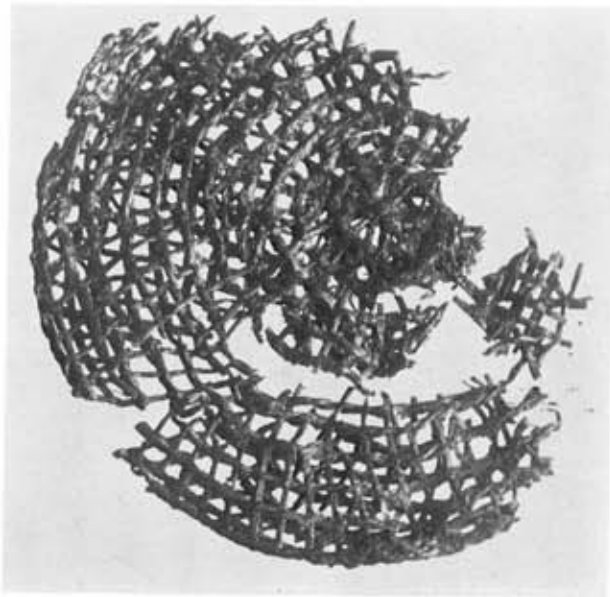


第49図　木　材

角形を呈するものである。しかし乍ら加工痕はその何れにも認められない。

㈢は貯蔵穴二号・六号に打込まれたままの状態で発見されたが、自然の丸木を適宜の長さに切り、一端をとがらせている。五号穴では長さ六三センチメートルおよび五五センチメートル、径は八センチメートル内外で、強く打ちこんだため頭が崩れていた。これらの棒杭は貯蔵穴壁の青色粘土層にそつて打ち込んであつたが、七号穴に見られる横材も認められず、その使用目的は不明である。

㈣は七号穴で発見されたが、貯蔵穴の一部壁面にそつて、自然の丸木を積み上げた状態であつた。洪水等による自然的堆積ではなく人為的な木組みであると推定されたが、地形と湧水にさまたげられて、その構造、両端の加工の有無を明確にすることはできなかつた。

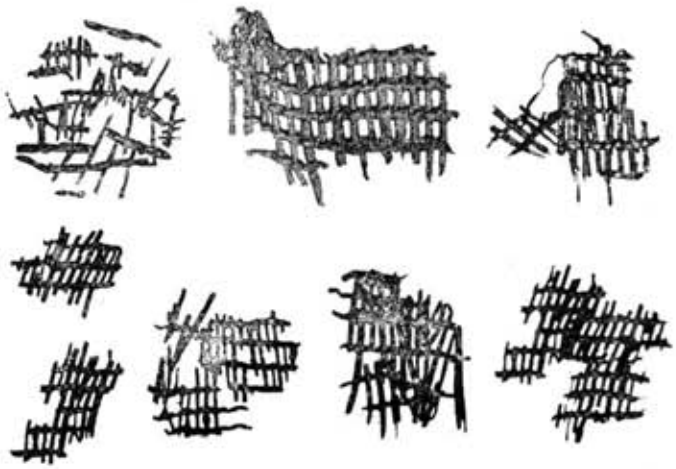


第50図　籠 $\left(\frac{1}{2}\right)$

なお、自然木、縦裂きの木材の中には燃えさしのものや木炭化したものが若干出土しているが、貯蔵穴の構築物の火災による残滓と考えるよりも、細砂、細石、土器、石器などの堆積状況から判断して、この遺跡の上方、至近の場所に住居跡が存在する可能性が濃厚である。

四　植物質製品

植物質製品はすべて単子葉植物を原料として作られており、「籠」「アミ」「ひも」の三種類に分類され、三種類共に七個の貯蔵穴の北側、および三個の貯蔵穴の中より出土し、食物に使用されたと思われる多くの木の実や、縄文時代中期の阿高系の土器に共伴することに注目する必要があろう。



第51図　ア　　ミ　$\left(\frac{1}{2}\right)$

。籠

この籠は三号の貯蔵穴より出土したもので、貯蔵穴の最下層に敷いてある木の葉と木の皮の中より出土しており、籠の上部は一部欠損しているが、ほぼ原形を留める。形状は直径約一五センチメートルの円形をなし、現存する部分は籠の底部であり、周囲を組んで「袋状」にしており、おそらく欠損部分が口であつたと思われ、ここから木の実等を入れておつたものと推定される。製作方法は籠の中心部に向つている「縦糸」に対して、円をなしている二本の「横糸」を交互に組み合わせて製作してあり、このような編み方は「もじり編み」とよばれ、この「もじり編み」手法が編み物の初期の基本をなす製作方法ではなかろうか。

この籠の利用法はおそらく食物とする木の実等を運搬する際に、物入れとして使用したものと思われ、当時の自然物採集経済の生活のあり方を示している資料と言えよう。

。ア　　ミ

ここでは一応「アミ」としておくが、漁撈のアミと限定するのではなく、広く「編み物」としてとりあつかうが、一部には漁撈用のアミとして使用したかもしれない。

このアミは北側の一号～三号までの貯蔵穴から出土するもので、貯蔵穴の中間部から底部にかけて、木の実と共に多数出土しており二種類からなる、型態の異なつたアミである。

第一類を縦糸の間隔の広いものと、第二類を縦糸の間隔の狭いアミとに分類した。

① 第 一 類

手法は第二類と同様であり、前記の籠と同様「もじり編み」手法である。

第一類は縦糸と縦糸との間隔が約五ミリメートル前後あり、比較幅的が広く、横糸は二本で、交互に縦て糸をはさみ、この連続で編んである。この原料の単子葉植物は蔓の種類である。遺物は製品の細片であり、原形の推定は不可能であるが、漁撈具の網としての使用も可能であろう。

② 第 二 類

この第二類も「もじり編み」手法を用いており、縦て糸と縦て糸との間隔がほぼ密着しており透き間がない。第一類と異なる点は単子葉植物でも、第一類のものは丸味を持つているのに対して、平たく幅の広いものであり、他はすべて第一類と同様である。

。ヒ モ

第52図 ヒモ $(\frac{1}{1})$

このヒモ（縄）は北側№1の貯蔵穴より一点出土しており、さらに昭和四十三年三月二十九日に田の整地のため排水溝を作った折、南側の貯蔵穴（№9）より一点追加出土している。

昭和四十二年十二月の調査時に七個の貯蔵穴の他に二個の貯蔵穴が発見されており、他に多くの貯蔵穴の存在があるものと思われる。№1貯蔵穴出土のヒモは約十センチメートルの長さであり、ひじように柔らかい単子葉植物によつて織つてあり、三本の繊維を利用し、中心の一本の繊維を軸とし、他の二本を交互に組み合せて編んでいる。

南側の貯蔵穴（№9）出土のヒモは約十五センチメートルの長さがあり、他はすべて№1貯

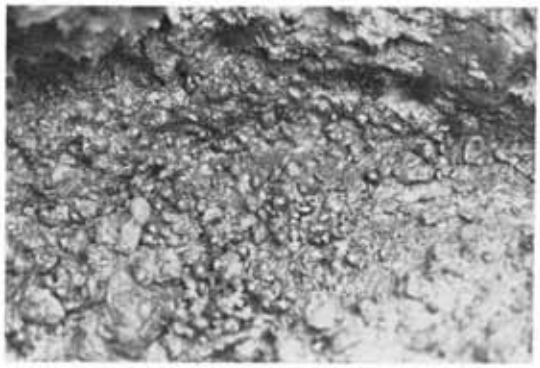
蔵穴出土のヒモと同一である。このヒモは一回結んであり、なんらかの道具として使用したものと思われる。

これらのヒモは木の実の中にあり、縄文時代中期の阿高系の土器を共伴することに注目したい。

五　植物質自然物

出土した植物遺体の大部分は貯蔵穴内の広葉圧積層下から得られ、長年に亘つて湿潤な状態に保たれていたものである。

種類の同定がはつきりしたものは、アラカシ・ツブラ椎の実であつて両者の出土率は五〇対一位と推定される。一号穴、二号穴、三号穴、五号穴、七号穴の五穴で、合計約八〇リットル—中空のため量でしか測定できない—を採取することができた。



第53図　木の実の出土状況

第54図　貯蔵穴内の木の皮の出土状況

その大部分は原形を保つているが、一部に変形あるいはこわれたものがある。破損の状況から推定した場合、腐蝕によるものではなく、貯蔵穴上部の暗灰色土層・黄褐色土層の堆積による垂直加圧によるものであると推定される。従つて、木の実は自然に採取された状態で、貯蔵を目的として穴につめこまれたのであろう。

木の実の底部には全部と言つてよい程、虫が入り込んだ小孔があり、木の実は中空で、皮の内側はやや炭化している。一部、袴が残存したものには腐蝕

後に炭化したものが認められる。

以上の他に、植物の茎、葉、樹皮、ならびに果実が数種出土しているが、炭化が著しいために残念ながら同定がきわめて困難である。

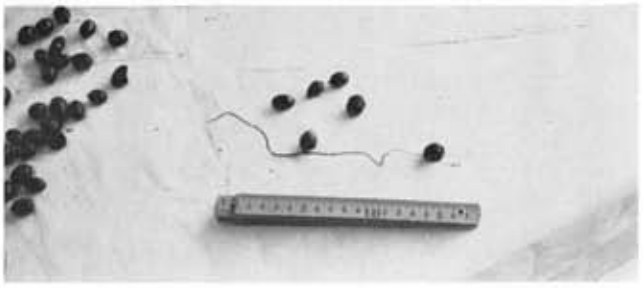
井尻正二・湊正雄氏の第四紀対比表によれば、当時は現在の気候に比してやや寒い位で、海水面変化も殆んど認められないので、出土した植物遺体に基き、且つ、遺跡付近の植物種類相についての調査結果（昭和四十三年度実施）を参考にすると、縄文中期の人々が居住していた当時のこの附近の植物群落は、現在のそれと大差なく、常緑広葉樹を主体とする森林が至る処に発達していたものと思われる。

付　記

貯蔵穴より採取したアラカシの実一〇〇粒を同町山本、吉永直氏が持ち帰り、水洗して有蓋透明ガラス瓶に入れ、同宅座敷床の間の隅に保管中、その中の一粒が発芽しているのを昭和四十三年七月四日に発見、直ちに県教育委員会に持ち込

現在の状況

ビンの中での発芽



ビンから取り出した状況

第55図　木の実の発芽

まれたので、その育苗管理を佐賀大学農学部横尾多美男教授に依頼した。八月より県林業試験場にて育苗管理を行ない、その成育を観察中である。発芽した一粒は貯蔵穴出土の他の種子と形状、表皮の色等異なる点は認められなかつた。貯蔵穴内では袴をつけていたと推定され明確な痕跡が見られた。

茎は徒長し、二枚の葉も非常にひ弱に感じられたが、横尾教室、県林業試験場の慎重な管理によつて、現在は写真で見る如く極めて順調である。

尚、当時の種子に発芽の可能性があるかどうか、甚だ疑問視されるので、貯蔵穴の絶対年代の客観資料として、発芽種子と同時に出土したと推定される他の木の実と木材の炭素14による測定を文化庁に依頼中である。

第四節　総　括

国見岳の南東山麓、有田川の沖積地をとりまく如く形成された段丘状の台地の突端に近く位置するこの「坂の下遺跡」は、縄文時代中期における生活立地としての好条件を備えると共に、腰岳の黒曜石露頭地帯に至近の距離に位置し、そこに残された石器群は腰岳の黒曜石と密接な関係がある。

なお、後背地の縄文時代早期の伊古石遺跡、先土器時代の盗人岩遺跡、国見岳の東北に存する先土器時代の白蛇山洞穴遺跡、平沢良遺跡や西側（長崎県）の福井洞穴、岩下洞穴遺跡など同一時期の所産ではないにしても、国見岳、腰岳を中心とする文化として将来考察する必要があると思われる。

今回の調査目的は、予備調査の結果から判断して、縄文時代中期における住居遺構の調査であつたが、前節までに個々の資料について具体的に説明した如く、七個の食糧貯蔵穴とその関連遺物を発見し、晩期については岡山県山陽町南方前池の例はあるが、この期の生活様式を考える上で極めて重要な問題を提起する結果となつた。

貯蔵穴内部からは自然採集の木の実が多量に出土したが、栽培植物である米・麦およびソバなどは一粒も検出できなかつた。

現在、この遺跡は湧水のため地下水位が高く低湿地で、あたかも泥炭層のような状態であるが、当時も食糧を貯蔵するのにある程度の湿度を必要として、意図的に低湿地を選んだのか、高燥の地であつた地形がその後の変動で現況の如くなったものかどうかは推定に困難である。南方前池遺跡の立地条件と類似している点も多いと思われるので、今後、この面での解明が必要であろう。

貯蔵穴内の木の実の利用のあり方はどうであつたか。従来、中部地方以東では製粉用具遺物として石皿、磨石、凹石そして敲石の出土が顕著であるのに対して、瀬戸内地方は堅果類は出土するが、道具は貧弱である。然し、九州では石皿などの出土例もあり、やや、東圏に近いとされていたが、七個の貯蔵穴を有するこの遺跡で、かかる製粉用具の出土が僅少であったことは注目されるべきであろう。この事は植物利用法に起因する問題で、長野県加曾利遺跡のコツペパン状炭化物の如き製粉による二次加工ではなく、なんらかの方法によるアク抜きの後、火熱処理の粒食も推定されなければならない。尚、石器の所で述べた如く、砥石状の石ではあるが、その中央部を握つて使用したと推定される握り部分に若干磨耗の認められるものがあり、一応、砥石として挙げておいたが、これは今後、検討すべき用具であろう。

この貯蔵穴の至近距離に生活の本拠である住居址があることが推定されるがその規模等については不明である。縄文時代中期の長野県尖石遺跡の一住居の平均値七人を考えた場合、七箇の貯蔵穴の貯蔵量から考えて単数の住居ではなく、ある程度の定着した集落も推定され、住居と貯蔵穴の位置関係と共に今後の問題である。

集落の存在については、貯蔵穴上層より多量の阿高式土器の出土によつても推定される。復元可能土器は無文の深鉢二個体のみであつたが、到底、単数住居の遺物とは考えられない程の土器片であつた。

土器は文様によつて六類に分けられるが、一類から五類までは指頭その他鈍端を有する器具によつて太い凹線による曲線文、連点文等を雄健に描く、いわゆる阿高式土器である。第六類として磨消縄文など後期の土器があるが僅少であり、しかも、土器片の周囲が磨滅した細片で、おそらく水害等によつて流入したものと思われる。

尚、阿高式土器についても、その堆積の状況は不自然であり、細砂や小石と混在して出土することからして、直接、食糧貯蔵穴との関係よりも、むしろ、至近距離にある住居址からの移動が考えられる。然し、第六類に見られる細片化、磨耗化の現象はなく、他の土器とは距離的相違を示している。

従つて、土器と貯蔵穴の関係はより阿高式の場合と緊密であり、尚又、貯蔵穴混入の阿高式土器はこの事を積極的に証明する資料と言え、同時代の所産と推定せざるを得ない。

石器類は土器に比して出土数は少ないが、注目すべき事は剝片鏃が多量に出土したことである。

その他の遺物で注目さるべきものとして、紡錘車型土製品がある。阿高式土器片を利用し、なかに孔をあけた土製円盤は燃糸を作るための紡錘車の役目をしたものであろう。縄文時代を通じて、編物の存在は従来報告されているが、晩期の紡錘車よりも古く、阿高式土器片利用の紡錘車は織物の出現時期についての問題を提起したものと言えよう。

今回の調査は暗渠排水工事のための緊急発掘であり、加えて、水田落水後という時間的制約の下に実施せねばならなかつたので、遺跡の全貌を明確にする事が不可能であつた。

調査の段階では、赤褐色層に入ると湧水のため地下水が高く半泥炭層の如き状態であつたため、層序的検討も十分加える事が出来なかつた。

しかし、何れにしても、食糧貯蔵穴を伴なう集落址として、県下初のこの遺跡は、文化の発展階梯上、原始社会経済史上に大きな問題を今後に提起したものと言えよう。

付　記

植物遺物については九州大学理学部細川隆英教授のご指導を頂いたことを報告いたします。

あとがき

遺物の整理や復原等には発掘期間中全調査員がこれに当つたが、遺物の実測図作成等には森醇一朗および佐賀大学考古学研究会の学生が長期間これに従事した。

報告書の執筆には左記の者がこれに当り、分担は括弧内のとおりである。

佐賀県教育庁社会教育課文化財係長　木下之治
（第一章・第三章）

佐賀県教育庁社会教育課文化財係　柴元静雄
（第二章第二節の石器・第四章の第一節・第二節第三節の石器・木器及び木製品・植物質自然物・第四節）

佐賀県立図書館資料課　森醇一朗
（第二章の第一節・第二節の層位・土器・第三節第四章の第三節土器及び土製品・植物質製品）

昭和四十四年三月二十日印刷
昭和四十四年三月三十一日発行

編集　佐賀県教育庁社会教育課

発行　佐賀県教育委員会

印刷所　佐賀県印刷局
佐賀市城内一丁三九